捻くれぼっちプレイヤー

異教徒

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡が人気者になれる世界。

そんな世界、現実にあり得るわけがない。

だったら仮想現実なら？

仮想現実での人気、クラスでの孤立。埋まっていくフレンド枠、余白の多いアドレス帳。

そしてＶＲと現実の知り合いたち。

こうして比企谷八幡は間違った青春の新たな一歩を踏み出すこととなる。

気を付けはしますがキャラの口調が時折ぶれたりします。そこのところご注意くだ

さい。

目次

第1章
第1話：リンクスタート ―――― 1
第2話：キャラメイキングとバグチート ―――― 5
第3話：イミテーションとナイフ 13
第4話：三次で二次の人間とは会えないが、二次で三次の知り合いと会うことはよくある ―――― 19
第5話：卑屈な妖精と毒舌な猫耳 24
第6話：ストーカー ―――― 30
第7話：仲間集め1 ―――― 36
第8話：仲間集め2 ―――― 43
第9話：空中遭遇戦 ―――― 49
第10話：作戦会議@ＡＬＯ ―――― 58
第11話：やはりこの人選は間違っている ―――― 67
第12話：寄り道ショッピング 74
第13話：作戦会議@ダイシーカフェ ―――― 79
第14話：とある国語科教師の罪と罰 ―――― 82
第15話：カフェ　ラフコフ奇譚：くま

のＰｏＨさん ——— 86
第１６．５話：ガールズトークｓｉｄｅシリカ ——— 96
第１７話：只々雑談をする回 — 103
第１８章：これは、デートであっても遊びではない ——— 109
第１９話：これは、デートであっても遊びではない。続 ——— 115
第２０話：斯くして序章は終わり、蝙蝠は舞う ——— 125
第２章
第２１話：蝙蝠の過去と禍根 — 132
第２２話：一色いろはは黒く嗤う 139
２３話：やはり材木座が強いのは間違っている。 ——— 145
第２４話：比企谷八幡は迷いながらも進み続ける（物理） ——— 153
第２５話：比企谷小町とログインエラー ——— 160
第２６話：比企谷小町とログインエラー。続 ——— 164
２７話：鼠と蝙蝠の邂逅 ——— 174

第1章
第1話：リンクスタート

比企谷八幡はぼっちである。
これについては疑いようのない事実であり、本人や家族も否定しない。
しかしながら、何事も百聞は一見に如かずと言うように実際に彼に会ってみたらどうなるだろうか。
恐らくは何も話しかけてこないかすぐに逃げ出すだろう。
そんな彼に、もし話しかけて来る人がいたら？
より正確に言うなら、彼の周りに多くの人だかりができ、どれも友好的な視線を向けていたとしたら？
それはもはや別人だと由比ヶ浜結衣は言った。
そんなのお兄ちゃんじゃないと比企谷小町は言った。
それは彼のアイデンティティーの崩壊だと雪ノ下雪乃は言った。
言い方は様々だが、要約すると彼に友人ができることはあり得ないということだ。
では、今の彼を見たら彼女たちは何と言うだろう？

比企谷八幡は、多くのプレイヤーたちに囲まれて万雷の拍手で迎えられていた。
そもそも、こうなった元凶はすべてこのゲームのせいである。
比企谷八幡は周りの人たちを見渡しながらこっそりとため息をついた。
すべての始まりは2週間前のことだった。
「ん？なんだこれ。」
居間に置いてあったものを見て彼は首を傾げた。彼が手に持ったそれはヘッドギア型のＶＲゲーム機だった。
「あみゅすふぃあ・・・？」
「どうしたの、お兄ちゃん。」
「うわあ！・・・ なんだ小町か。脅かすなよ。」
「ちょっと後ろから声かけただけなのに大袈裟だなあ。ところでそれ何？」
「わからん。なんか頭にかぶるものだってのはわかるんだけど」
そう思ってほかに何かないか見てみると、アミュスフィアの隣にはゲームソフトらしきものが置いてあった。
「なになに・・・ アルウヘイム・オンライン？小町これがなんだかわかるか？」
そう尋ねると、小町はものすごい勢いでソフトをひったくた。
「え、う、うそ！これって今ものすごい流行ってるゲームで、自由に空を飛んだりでき

るって人気なんだよ！

　なんでそれがこんなところにあるんだろう？お兄ちゃん何か知ってる？」

「全く。だけどどうせまた親がその場のノリで買ってきたんじゃないのか？あの人たちはいつも急に旅行に行ったりするし可能性がないわけじゃないだろう？」

「うん、確かに。だけど、わざわざアミュスフィアまで買ってくるなんてよほど本気だよ。たしかこれ2，3万はするはずだから。」

「げっ。高っ！そんな金があるならもっとおいしいもの買って来いよ…」

「それもそうだけどね…　でも、面白そうじゃん。早速やってみようよ。」

「だめだ。」

　八幡がゲームソフトを取り上げると小町は不満げな声を上げた。

「もー！なんでダメなの？これはお兄ちゃんのじゃないんだから指図しないでよ。」

「お前のものでもないだろう。それにお前は受験勉強があるだろう。ほら、とっとと勉強しろ。」

　そう言われると弱いのか、小町はおとなしく引き下がったが、それでも未練がましくアミュスフィアをちらちら見ていた。

「終わったら感想聞かせてね！絶対だよ！」

「はいはい。」

そう適当にあしらった八幡は再びアミュスフィアに目を落とした。

「…　少し、やってみるか。」

こうして、比企谷八幡はアルヴヘイム・オンライン、通称〈ＡＬＯ〉の世界に足を踏み入れた。

第２話：キャラメイキングとバグチート

ＡＬＯをプレイして、まず最初にすることはキャラクターの作成だ。

大抵の人はここでかなり時間をかける。なぜなら、今後のゲーム内での容姿がここでほぼ決まってしまうからだ。

故に、ここで悩みぬいて決まったキャラクターとともにゲームをプレイしていく覚悟で選択をしていく。

しかし、比企谷八幡は違った。

まず名前だが、なんの捻りもなく『８００００』に決定した。

これには彼なりの過去の教訓から基づくものである。彼も昔はいくつかの捻った名前を付けていた。

しかし、『∞×１００００』という名前の意味をだれも理解してくれず、『読みにくい』『打ちにくい』と酷評を受け、それ以来は『鶴岡』などの読みやすく、自分にのみわかるネーミングをすることにしたのである。

そして次は種族の選択に入った。

「ふーん。十種族の中から一つ選ぶのか。」

なれない仮想スクロールに苦戦しつつも何とか全ステータスを見ることに成功した彼は、迷うことなくスプリガンを選択した。

彼はゲームではぎりぎりの距離からデバフをかけ続けて動けなくなったところを遠くから弓や魔法で仕留める、徹底したチキンスタイルを貫くプレイヤーで、デバフ専門種族となれば完全に彼の得意分野である。

「何より、ソロプレイに使えるトレジャーハントも完備とくれば、俺のためにあるようなものじゃないか。」

こうして、八幡の種族はスプリガンに決定した。そしてスプリガンが不人気種族であると知るのはもう少しだけ後のことである。

そして最後に容姿の選択である。これには課金することで追加のオプションを選ぶことができるが、彼は自分の容姿をそのまま選択した。つまりは腐ったような目もそのままである。

こうして完成したキャラクターを見て、彼は満足げにうなずくと珍しく颯爽とした足取りで妖精界へと足を踏み出した。

そして地上へ真っ逆さまに落ちていった。

「うわあああああああああああ!?」

情けない悲鳴を上げながら自由落下していく様はここに雪ノ下雪乃がいたら満面の

笑みを浮かべるほどに哀れだった。
「やばい、死ぬ、死ぬうううううう！」
もはや普段のキャラさえ崩壊してひたすらに落ちていく彼を救ったのはただの偶然だった。
「うぎゃあああああ・・・・　うん？」
途中からやけくそに手を振り回していると、突然手元にコントローラーのようなものが現れた。
それを操作してみると、何とか飛行がコントロールできるようになった。
実はマリオカートが得意だったりする彼にとって、この程度のことは朝飯前だった。
そして緩やかに減速して着地した先はどこともわからない森の中だった。
「ふむ。普通、ここらへんでチュートリアルの一つぐらいあってほしいんだが・・・」
その言葉に答えるものは誰もいなかった。ただしーんとしているだけでモンスターが現れる気配すらない。
仕方なく頑張って出した地図を頼りにあちこちを歩き回っていると、どこかで話し声がした。
「おい、準備はいいか？」
「ああ。そろそろターゲットが近づいてくるはずだぜ。」

息をひそめてあたりをうかがうと、布で口元を覆ったいかにも盗賊といった格好をしたサラマンダーが二人茂みに隠れていた。
「しかし、マジかよ。ここをレイド帰りのパーティーが通るなんて。」
「本当さ。証拠に、近くでレイドイベントが行われてんだよ。それも初心者向けのな。」
「で、俺たちがそいつらからアイテムを根こそぎいただくと。」
「そうさ。なんでも初心者には不釣り合いなほどのレアアイテムもあるらしい。これを見逃す手はないだろう?」
「それもそうだな。あー、お宝が待ち遠しいぜ。」
「しっ。誰か来たぞ。」
そうこうしてるうちに5人のパーティーがやってきた。
「よし、合図で行くぞ。3、2、1、かかれ!」
茂みから飛び出してきた盗賊たちに一瞬驚いた様子を見せたが、すぐに皆が戦闘態勢に入るパーティーを見て、二人の盗賊はにやりと笑うと、おもむろに小刀を構えた。
「さあ、かかって来いよ初心者さんよお?」
まず始めにインプの少年が魔法をたどたどしく唱えて放った。
それに合わせて後方に控えるウンディーネの少女が必死に支援魔法をかけ、ノーム二人が壁を作り、シルフの青年が風を起こしてもう一人の注意を引き付けていた。

それはまだまだ拙くはあるが立派な連携の一つで、今までの努力の証といえるものだった。

「はん。それがどうした？」

小刀の一振りで強烈な熱風が巻き起こり、前衛のノームもろとも魔法を吹き飛ばした。そしてもう一人が小刀を振ると、今度は冷気の嵐でウンディーネとシルフを氷漬けにした。

「さて、一つ提案だが、今ここでアイテムを全部置いて帰るなら見逃してやってもいいぜ？」

「誰が脅しなんかに従うか！これはパーティーのみんなで手に入れたアイテムだ。お前らなんかには絶対渡さない！」

敵意をむき出しに叫ぶ少年に、二人は顔を見合わせ大声で笑うと少年の方へ向き直った。

「じゃあ死んどけ。」

一方その頃八幡はどうしていたかというと、ひたすら息をひそめていた。

彼は、厄介ごとには極力かかわらない主義で、ゲーム内でのＰＫも積極的な容認派ではないがそういう遊び方もあるという程度には理解を示していた。

なにより、今出て行ったら初心者の自分では戦うどころかターゲットにされて身ぐる

みはがされるのが落ちであると考えていた。
なのでこうして潜伏魔法と幻惑魔法の重ねがけをして潜んでいた。
はたから見ればただの茂だが、見破れる人からしたらモンスターが隠れているように見える。
こうして、二重の潜伏を行い難が過ぎるのをじっと待っていた。
（ちっ！こんな最初からＰＫに出くわすなんてほんとついてない！）
思わず舌打ちしたいのをこらえてじっと縮こまると、こっそり戦況をのぞいてみた。
すると、案の定インプの少年が追い詰められていた。ぎりぎり紙一重のところで攻撃をかわしてはいるが、どんどん間を詰められていた。そしてその背後には八幡。
（おいおい冗談じゃないぞ!?なんでこっち来るんだよあっち行けよ！）
しかし、そんな願いもむなしくついに八幡の目の前まで後退してしまう。
（くっそ。こうなったらイチかバチか・・・）
サラマンダー二人がインプに飛びかかった瞬間、八幡は黒煙を展開した。
「うわっ！なんだ？いったい誰が・・・」
「焦るな！相手のインプがかく乱で仕掛けただけだ！こんなの、熱風で吹き飛ばせる！」
そう言ってサラマンダーは小刀を振ろうとしたが、その手には小刀はなかった。
「食らいやがれ！」

彼が困惑していると、もう一人のサラマンダーから放たれた斬撃は見事に人影を断ち切った。
サラマンダーの、人影を。
「なっ!?おまえ!?」
「えっ?」
同士うちによる一瞬の戸惑いのスキに、インプの少年は残った一人に魔法を打ち込んだ。
「がっ!?くそ、てめえ。小汚い真似を…」
「小汚いのはお前だろ。」
「!?　誰だ!?」
霧の中から八幡は顔を出すと、立て続けにデバフを打ち込んでサラマンダーのスピードを０近くまで落とした。
「動けねえだと…　てめえ、スプリガンか?」
「そうだよ。この種族のデバフってほんと便利だな。」
「やっべえ…　スプリガンで黒髪で強いプレイヤー…
まさか、黒の剣士!?」
残念ながら、サラマンダーの予想は全然違う。実際は初めて一時間もしない超初心者

なのだが、そんなことを知らない人からしたら噂で聞く見た目によく似た高レベルプレイヤーを連想しても仕方ない。

そしてこの状況を利用しないほど甘い八幡ではなかった。

「ああ、そうだよ。俺が黒の剣士だ。これ以上ひどい目にあいたくなかったらとっとと帰れ。」

「ひ、ひいいいいい!?」

つい数十分前の八幡と同じ声を上げて退散したサラマンダーが見えなくなるのを確認して八幡は振りむいた。

「これでもう安心だろ。怪我はないか?」

これが八幡のＡＬＯ内での人気者への第一歩となるのだが、これが後々大騒動になろうとはだれも想像もしていなかった。

第３話：イミテーションとナイフ

「ありがとうございます！あれだけ強い武器を持った人たちを同時に相手取って戦って、すごくかっこよかったです！」
「いや、あれはちょっとした小細工を弄しただけだから・・・」
「謙遜はいいですよ。それより、あなたはやっぱり黒の剣士なんですか？」
キラキラした期待に満ちた目で見られてとても居心地が悪いのだが、俺はただの初心者だ。
そのことを伝えると、彼は最初は冗談と思って笑っていたが、プレイ時間を見せるとそのまま固まった。
「えっ？プレイ時間１時間て・・・　ついさっき始めたばかりってことですか!?それであの実力って、あなたいったい何者なんですか！それ以前にスプリガンが何で１時間でこんなところに？」
頭にはてなマークが浮かんでるところを見るとどうやら俺はかなりイレギュラーな事態に巻き込まれているらしい。
ちょうどいいのでこのゲームについていくつか質問をすることにした。

「さっきスプリガンが一時間じゃここには来れないみたいなこと言ってたけど、それってどういうことだ？
「ああ。それはですね。普通は、始めた最初のログインの時はそれぞれの種族のホームタウンからスタートするんです。８００００さんみたいに森の中に飛ばされたっていうのは聞いたことがないんですけど・・・
　あまり力になれなくてすみません。」
「いや、気にしなくていいよ。それより、ここから一番近い町を教えてくれるか？」
「お安い御用です！仲間たちもそこで待ってると思うので、もし良ければそこに来てください。何かお礼がしたいので。」
「おう。わかった。じゃあ、案内頼むよ。」
「はいです！」
　と、ここで俺は一つ気になっていたことを口にした。
「ところで、この武器ってどうすればいい？さっきのやつから盗った小刀なんだけど、俺のものにしちゃっていいのかな？」
「えっ!?いつの間に盗ったんですか！第一どうやって・・・」
「窃盗スキルがあったから使ってみたんだが、これってこうやってＰｖＰ使うんじゃないのか？」

「違いますよ！アイテムは時々モンスターに奪われたりもしますが、それでも一定時間は所有権が持ち主に持続するものなんです。だから人から武器を奪ったり悪用はできないんです。」
「でも、一向に消える気配がないぞ。それに所有権はどれぐらい持つものなんだ？もうかなりの時間がたったと思うんだが・・・」
「たしか、１０分ほどだったと思います。」
　余裕で３０分は経過してるな。
　しかし、これはさっきの戦いからしてみてもかなりの高性能武器だろう。下手をすればこのゲームの中でもかなり上位のレアリティかもしれない。思いもよらないお宝が転がり込んできたものだ。
「よし。じゃあ、システム的にこれは俺のものってわけでいいんだな？」
「ええ。問題ないですよ。もし万が一相手から返せと言われてもちゃんと言い返せます。これはもうあなたから所有権は移りましたよって。」
「となると、今後は小刀のスキルを伸ばしていく必要があるか。どこかいい練習場所知ってるか？」
「そうですねえ。さっき僕たちが行っていた『動く樹海』というエリアがあるんですが、そこならちょうど初心者向けのイベントをやってるのでお勧めですよ。」

「そういえば、あの二人もそんなこと言ってたな。レアアイテムもかなりあるのか？」
　あの二人は上級者のように見えたが、そんな人たちでもほしがるようなアイテムがあるとなれば、ぜひ一度行ってみたい。ただし、安全性が確保されたルートで。
「それなんですけど、自分たちのパーティーでは中級ぐらいのと、よくわからないアイテムばっかりだったので。何がレアなのかよくわかんないです。もしよければ、拾ったきれいな水晶玉いりますか？売ったらそこそこの値が付くと思いますけど。」
「いいのか、みんなで集めたレアアイテムを勝手に渡したりして。」
「大丈夫ですよ。自分の命の恩人ですし、それぐらいはみんなも許してくれるでしょう。」
「じゃあ、ありがたくもらっとくよ。」
「はい。そろそろ町に着きますけど、これからどうしますか？」
「そうだな…　少し町を見て回ってから行くわ。」
「わかりました。じゃあ、終わったら自分にメッセージ飛ばしてください。
　あっ。メッセージの飛ばし方わかりますか？」
「すまん。わからん。」
「だったら、今からフレンド登録しときますので申請を受諾してください。そしたらそこにフレンド欄が表示されると思うんですが、そこからメッセージを選択すると送れま

すよ。」

　送られて来たフレンド申請を見て、俺は不覚にも少し感動してしまった。今までどのゲームでも実はフレンド欄を埋めるのが最後の難所じゃないのかと思うほど埋まらなかったフレンド欄に名前が刻まれたのだ！

「ディズティ・・・　で、あってるか？」

「はい、あってますよ。こっちは８００００さんははちまんさんで合ってますか？」

「ああ。じゃあよろしく。ディズティ。」

「こちらこそお願いします。８００００さん。」

　それからしばらく森を進み続けるとやっと道らしい道に出てきた。

「ここが『迷いの林道』です。ここを地図に沿って行けば『ボーウェンデン』という町に出ます。そこに行けば武器屋や商店、酒場もあります。自分たちは何かあったらここの酒場に落ち合うようにしているので、みんなそこに集まっていると思います。地図で見ると、この『蜜の火鉢亭』というところになります。」

「ふむふむ。あとほかに、武器屋なんかはあるか？」

「そうですね・・・　さっき森を抜ける際に倒したモンスターの報酬があるのでそれを考えると、中央広場付近の『ワフラド』という店がおすすめですかね。フルプレートからローブまで何でもありますから。あそこならきっといいものが見つかると思いますよ。」

「わかった。じゃあ、町に着いたら早速行ってみるか。」
俺は手持ちの金額に目をやり、どんな装備を買おうか考えを巡らせていた。
「俺が装備を着けるとしたら重装備か軽装備のどっちにしたほうがいいと思う?」
「そうですねえ。さっきの戦い方で行くと、軽装で素早く立ち回って素早くとどめを刺したほうがいいと思います。」
「そうか。じゃあ、軽装と小刀の鞘とポーションなんかを買うか。」
「どれもこの街でいいのが売ってますよ。・・・ あっ。町が見えてきましたよ。」
「じゃあ、いったんここで別れるか。」
「そうですね。では、またあとで。」
「ああ。じゃあな。」

第４話：三次で二次の人間とは会えないが、二次で三次の知り合いと会うことはよくある

町に着いてまず始めにすることといえば人それぞれだが、俺はまず全ての店をチェックする。その中で気に入った店で買い物をしたり今後の予定を立ててじっくり回るのが鉄板となっている。

「これは、ちょっと無理がある…」

あまりの店の多さには頭を抱えた。

「ここは素直に進められた店に行ってみるしかなさそうだな。」

本当は水晶玉の鑑定をして早いうちにお金に換えておきたかったのだが仕方ない。そう思いながら言われた通りに広場を目指して歩いていると、道を走っていた人にぶつかられ尻もちをついた。

「っつ…」

「ご、ごめんなさい！大丈夫ですか？」

「ああ。大丈夫だ。そっちも怪我はないか？」

ぶつかった相手の顔を見てみるとお団子くくりをしたウンディーネの少女だった。

少女は銀髪で背中に槍を背負っており、真新しいローブを着ていることから初心者と推測できた。
「わたしは大丈夫です。すみません。今急いでいて。」
「どうしたんだ？何かあったのか？」
「はい。今『動く樹海』周辺で初心者を狙ったＰＫが起きたそうなんで、仲間たちに何かないか心配になって。」
「メッセージ機能は使ったか？あれがあったらわざわざ行く必要もないと思うが。」
すると少女は虚を突かれたかのように固まった。どうやら盲点だったようだ。
「えーっと。やりかたを教えてもらってもいいですか？わたし最近始めたばかりで…」
「まずフレンド枠ってところを開くと、フレンドの名前が表示されるだろ？そこからメッセージを選択すると送れる。」
「あっ！出来た！すごい、これめっちゃ便利だ！こんどみんなにも教えよーっと！」
無邪気に喜んでいるのを見て、これが実は受け売りですとは言いにくかった。まあ、そんな事をわざわざ言う必要もないわけだが。
「ところでＰＫの件だが、さっき退治されたらしいから大丈夫みたいだぞ。ほかにも同じことをやってるやつがいないという確証はないが、一組やられたとなったらそうそう手出しはしてこないだろ。」

「そうなんですか！じゃあ安心ですね。それと、もしよければフレンド申請してくれませんか？わたしのパーティーってスプリガンいないんですよね。スプリガンて一人居たら便利じゃないですか？」

それはつまり二人はいらないほどしか役に立たないってことですか。

見知らぬ少女にあたっても仕方ないのでぐっとこらえてフレンド申請を送るとすぐに承認された。

「えーっと、名前は『ゆいゆい』？」

「えーっと。『８００００』？これってもしかして『はちまん』？」

「あの、もしかしてだけど・・・」

「お前由比ヶ浜か？」

「ヒッキー、なの？」

例えＶＲであっても世界は狭い。それを実感した瞬間だった。

「えーっ!?じゃあ、ＰＫ倒したのってヒッキーだったの!?」

「声がでかい。あと、ヒッキーで呼ぶな。８００００とよべ。」

「えー。それだとなんか距離間開いた感じじゃん。ハチでいいよね！」

「よくねえよ。それじゃあまるで俺が義理堅いみたいじゃねえか。」

「たしかに、それだと全国のハチがかわいそうだよね・・・」

「お前、何気にひどいよな!?俺そこまで言ったつもりないんだけど?」
　だいたい犬キャラはお前のほうだろうが。
「今何か失礼なこと考えなかった?」
「はあ?何言ってんだよ。言いがかりはよせよ。」
「完全没入型のゲームは感情表現がかなり大味になってるんだよ。だからいやらしいこと考えたらすぐバレるんだよ。」
「誰がお前で変な妄想するか。お前みたいなビッチで。」
「うわ。まだそんなこと覚えてたんだ。それはもう違うってわかったでしょ?」
「男子とべたべた話してるやつはだいたいビッチだ。」
「ボッチの偏見ってこわ…」
　リア充としゃべってばかりのやつにボッチの気持ちなんてわからないだろうな。
　女子から気持ち悪がられて男子からさけられてそのくせオタクや変態扱いされて、理由もないのに理不尽な扱い受けてるやつがいるんだぞ。ソースは俺。
「なんか… ごめんね… ?」
　おい、そんなかわいそうなものを見る目でこっちを見るな。やめろ、優しく肩を叩くな。やめてくれ!
「そんなことより!　どこかアイテムの鑑定ができるところ知らないか?ちょっとアイ

テムを売っておきたいんだが・・・」
「うーん。アイテム売るとしたら、ちょっと遠いけど『ホルツハイデ』ってところはレアアイテムの取引が盛んだから行ってみる価値があると思うよ。案外掘り出し物の可能性だってあるわけだし。」
「わかった。覚えておく。でも、こんな水晶玉一個にそんな価値があるかどうか・・・」
［水晶玉？見せて見せて！］
「ちょっ、近い近い！って、ああっ！」
「え、どうしたの？」
「なんか使用ボタン押しちまった・・・」
見ると、割れた水晶玉が手元で光になり収束してだんだん小さな人の形を作っていく。
水晶玉を割って光の中から現れたのは、手のひらサイズの小さな妖精だった。

第5話：卑屈な妖精と毒舌な猫耳

「なんだこいつ？ちっさい妖精？」
「はい。私はナビゲーションピクシーです。ご主人様のをサポートする機能をもち、冒険を円滑に進めるための存在です。以後、よろしくお願いします。」
突然現れたこいつはそう言ってふわっと一礼をした。その様子はまるで精巧な人形のようだ。
「これって、どうすればいいんだ？売ったら結構高かったりする？その手の趣味の人とか好きそうだし。」
「ちょっと!?こんな小さい子を売ろうなんてヒッキーには人の心がないの？」
「知るか。今の俺に必要なのは金と強い装備だけだよ。そのためなら外道と呼ばれようが知ったことじゃないな。」
「鬼、悪魔、鬼畜、外道、ロリコン！」
「最初の４つは甘んじて受け入れるが、ロリコンは違うだろ？俺はこんなやつ必要としてないし、それなら必要なやつの手にわたってほしいという純粋な思いで売却しようとしてんじゃないか。」

「?!今、ヒッキーの目が一瞬ドルマークになった！」
　由比ヶ浜の糾弾を軽く受け流していると、妖精は少し顔を青くして体が震えていた。
「え、えっとですね。私はもうすでにご主人様の専用アイテムとしてロックされてしまったので売却はできないといいますか・・・　それにですね！私、こう見えて結構レアで便利なんですよ！私がいれば地図をいちいち見たりする必要もありませんし、敵が来たらすぐにお知らせ出来ますし！」
「いや、いらん。そんなの、索敵スキル取ったらすぐだし。だいたい地図を見るくらいの手間ならさして変わんないだろ。
　うーん。これは分解ってできるのか？試しにやってみるか。」
　すると、妖精は体をがくがく震わせてほとんど泣き出しそうな声で必死に腕にしがみついてきた。
「お、お願いです！何でもします、言われたことはたとえ無茶でも絶対にこなして見せますから！だから分解したりだけはやめてください、お願いします・・・　！」
「ちょっとヒッキー、女の子泣かせるとかサイテー！こんなに言ってるんだから使ってあげたらいいじゃん。それにヒッキーのコミュ障を治す訓練だと思ってさ。」
「ＮＰＣに話しかけるなんて余計に末期だろうが！だいたい、こいつはプログラムに沿って話しているだけで普通に話してるように見えても一定の答えしか返せないよう

にできてんだよ。」

いくら正論を言っても駄々をこねる由比ヶ浜に辟易した俺はこっそりと妖精に尋ねてみた。

「なあ。あいつの声を聞こえなくすることってできるか？」

「それはちょっと・・・　あっ、いいえ！できます！できますからアイテム欄を開かないでください！」

「じゃあよろしく。あと、ここから蜜の火鉢程までの最短ルートも頼む。」

「かしこまりました。では、今からナビゲーションを開始します。前方５０メートル先の角を右に曲がって、そこから『ポーション専門店　モーリス』を左に行くと――――――――――――――――――――――――――――――――」

その間も由比ヶ浜はずっと何か叫んでいたが俺は無視して目的地へと向かった。

それから妖精の指示に従って歩いくすぐに目的地が目に入った。

中に入るとかなりの数の人が座っており、情報交換や雑談に花を咲かせていた。それらの様子をできるだけ視界に入れないようにディズティたちの座っているテーブルへ向かった。

「やあ、８００００。町はどうだった？」

笑顔で聞いてくるディズティに俺は少し疲れた顔で返事を返す。

「おう。なかなかによかったぞ。だけど、リアルの知り合いと会っちまったのがなあ…」
「ああ。それはたしかに気まずかったりするよね…」
　彼は苦笑いでうなずいていたがそうじゃない。由比ヶ浜とゲームの中でも関わらないといけないのがげんなりするだけだ。
「そんな話はいいんだ。それより今ここにいるのでパーティーは全員揃ってるのか？」
「うん。みんなを紹介するね。こっちのシルフの人が『ピラー』。主に前衛から中衛を担当してくれてる。」
「今回はディズティを助けてくれてありがとう。これからよろしく頼むよ。」
　手を差し出してくるピラーと軽く握手をすると、今度はノーム二人が手を出してきた。
「俺たちは『デオ』と『グスク』だ。双子でこのゲームをやってる。二卵性だから普通の兄弟程度にしか似てないんだけどな。
　で、こっちのウンディーネが俺らの姉貴の『アンジェ』。気をつけろよ。見た目に騙されると後で痛い目を痛いたたたた！」
「あんた何言ってんのよ！私がいつそんなことをしたって？」
「今してる…　痛い痛い痛い！」

耳を引っ張られ涙目になるデオを見て、俺は戦闘禁止区域の抜け道の恐ろしさに震えた。コブラツイストがセーフってどういうことだよ？

「これがシステム的にセーフというのは納得がいきません…」

妖精のつぶやきに俺が同意で返すと、ディズティが妖精に気づいて驚いた顔になった。

「それってナビゲーションピクシー!?すごいね、どこで手に入れたの？」

「ああーっと、ディズティがくれた水晶玉から…」

「ええっ！本当!?そんなすごいものだったの？」

「なんかごめんな、こんないいものもらっちゃって。なんか今度お返しする。」

「ううん、別にいいよ。捨てたものがレアアイテムだったなんてよくあるし。それで今更所有権を主張するのはノーマナー行為だしね。」

「そうだね。僕たちもそれでいいよね？」

ピラーの言葉に皆がうなずくのを見て俺はほっと胸をなでおろす。今ここで決闘になったら間違いなく負けるだろうしな。それに相手が勝っても持ち物として贈与はできなさそうだし、誰にも得がない。

「その子の名前はなんていうの？呼び方は自分だ決めれるらしいけど。」

「そうだな…『セレビス』なんてどうだ？お前にはぴったりだと思うぞ。」

「はい！それでは私の名前はこれからはセレビスです。改めてよろしくお願いします。」
「かわいいーっ！この子欲しいっ！セーちゃん、うちの子にならない？」
「すみません。私はご主人様の所有物としてロックされてるのでそれはできないんです。でも、フレンドのメッセージ機能を使ってお話しすることはできると思います。」
「８００００！絶対にこの子大事にするんだよ！泣かしたら許さないらね！」
真剣な表情でアンジェが言っているが、それは俺からしたら非常にまずい。だってもうすでにさんざん泣かしている。これはセレビスに口止めの必要がありそうだな。
そう思って小声で命令をしようとすると、突如目の前にお団子くくりのめんどくさいやつが現れた。
「ヒッキー!!!ここにいた！急に無視してきたりしてひどくない？それにちょっと話があるから来てよー。ゆきのんが少し話あるってー！」

第6話：ストーカー

「雪ノ下が？あいつもＡＬＯやってたのか。なんか意外だな。」
「うん。私も初めて知ったときはびっくりしたんだけどね。なんでも陽乃さんに無理やり押しつけられたんだって。ゲームの中だとわざわざ会いに行く手間が省けるし好都合なんだって。」
「つまりはあくまで連絡用ツールってことか。雪ノ下らしいな。」
「名目上はそういうことになってるんだけどね・・・」
「どういうことだ？」
「会えばわかるよ。ほら、あそこにいるのがそう。」
　由比ヶ浜の指さす方向を見ると、そこには黒髪のケットシーの少女が立っていた。彼女は少し釣り目がちで黒猫のようにつんとすまし顔でいるが、目の前をケットシーが通るたびに耳がピコピコしたり手がワキワキしたりしていて周りの注目を集めていた。
　てか、あの猫好きはどう考えても雪ノ下だよな・・・
「おーい！そこの猫大好きフリスキーさん！こっちだこっち！」
　大声で叫んでやると、雪ノ下は一瞬周りを見回した後すぐこちらに気づいて顔を真っ

赤にして歩いてきた。
　当然、周囲の注目を集めいているので見掛け上は何もせず、けれどしっかりとみぞおちを殴ってきやがった。そしてシステムの判定はセーフ。やっぱりこの欠陥は運営に報告する必要がありそうだ。
「何かしら、比企谷君。突然わけのわからないことを叫び始めて脳みそが腐ったのかと思ったわ。ああ失礼。始めから目は腐ってたわね。きっとそこから脳もやられたのでしょう。いい病院を紹介するからぜひ行ってみて頂戴。あなたの使えそうな部分は最大限有効活用してくれるわよ。それで多くの人が救われるならきっと名もなき臓器提供者として電子上の数値として生きていけるわよ。」
「余計なお世話だ。目は腐ってはいるがまだ脳まで到達はしてない。」
「ヒッキー、目が腐ってるって自覚はあったんだ…」
　由比ヶ浜が苦笑いする。主にお前ら周辺の発言が原因なんだがな。
「ところで、本題はなんだ？わざわざ呼び出してくるってことはゲーム内で何か用事か？初めに言っとくが俺は今回あまりトラブルに関わりたくない。だから役に立たないと思うが一応聞いておく。用はなんだ？」
「それは助けないことを前提に話せってこと…？」
「仕方がないよ。だってヒッキーだもん。」

「そう言うこった。もしそれが嫌なら諦めて他を当たれ。」
俺が冷たく突き放すように言うと、雪ノ下は一瞬何かをこらえるように唇を噛むと話し始めた。
「実は最近、ゲームで私と姉さんが何者かに追い回されてるの。」
「それって、ストーカー…」
「ええ、そうね。私たちのパーティーのメンバーにまで手を伸ばしてきて… 姉さんは運営に言ってはいるんだけど、付きまとい程度だと証拠が無いと動いてくれないらしいの。」
「だったら高レベルプレイヤーに討伐を頼んでみるとかはしたのか?」
「したけど、すぐに復活するから意味がないわ。おまけに、ストーカーもかなり強くて討伐隊が何人かやられたの。どうやら複数人でパーティーを組んでやってるようね。」
それを聞いて俺が思わず顔をしかめると、隣で由比ヶ浜も神妙な顔をしていた。
相手が油断していればこっちのものなんだが、複数人を同時に相手となると少し無理があるな…
おまけにゲームシステム上、復活があるということはいくら倒しても意味がないどころか戦った全員が顔を覚えられて復讐される恐れがあるということだ。相手にばかり有利な条件でさすがの雪ノ下もお手上げなのだろう。

「陽乃さんは何か言ってるのか？あの人なら相手に地獄を見せそうなものなんだが・・・」
「姉さんが得意なのはあくまで情報戦よ。一応、人並み以上に武術のたしなみはあるけれど、経験の差を覆すほどではないわ。」
「となると万事休すか・・・」
「あなたは何か案はないの？それを期待して呼んだのだけれど。」
「こういうことに関しては俺よりもっと得意なやつがいるんだよ。な、セレビス？」
「はい！そういうことならお任せください！」
　俺の胸元からひょこっと顔を出したセレビスが元気よく返事をする。
「あら、ナビゲーションピクシー？それにしてもセレビスって名前は・・・」
「いい名前だろ？こいつにはぴったりだ。」
「卑屈が似合うのはどう考えてもあなたのほうでしょう・・・　まあいいわ。あなた、どれぐらいの権限を持ってるの？一プレイヤーが持てる分だから大したものはないんでしょうけど。」
「いえ、さきほどご主人様に脅されてカーディナルシステムからいくつかの権限を奪ってきました！その際、私と同じナビゲーションピクシーのようなシステムが手助けしてくれたので容易に侵入することができました。
　なので今の私は会った人物のプロフィールとダンジョンの地図の全体図表示など、い

ろいろとパワーアップしていますのできっとお役に立てます。」
「むしろ比企谷君のほうがストーカーになれそうな能力ね。」
「こんなちっちゃな子に犯罪を犯させるなんて、ヒッキー最低！」
「いや、俺もここまでしろと言った覚えはないんだが・・・・」
　俺も困惑しているのをよそに、セレビスはさっそく何やら操作を始めていた。
「何してるんだ？なんかたくさんのプレイヤーの名前が挙がっているが・・・」
「今回の件に協力してくれそうなメンバーのリストを作成してるんです。
　そうですね・・・　まず初めに黒の剣士さんから当たりますか。」
「いきなりの大物!?そんな人が助けてくれるとは思えないんだけど・・・」
「私も同意するわね。何の見返りもなく助けてくれるわけがないわ。それよりももっとほかのプレイヤーを当たったほうがいいんじゃないかしら？」
「いや、ここはこれぐらいがちょうどいい。ダメもとで言ってみて、そのことを本人が周りに言いふらしてくれたほうが敵へのけん制になる。これだけのハイレベルプレイヤーを集めてると勘違いしてくれたほうが都合がいい。よくわかってるじゃないか。
「ありがとうございます！さっそくこの調子で頑張っていきましょう！」
　俺たちが意気投合していると、雪ノ下たちはそろってため息をついていた。
「ペットは飼い主に似るっていうけど・・・」

「こんなところが似なくてもいいのにね…」
「おーい！早くしないと置いていくぞ！次の目的地はアルンだ。結構な長旅になるぞ。今のうちのこの街で済ませておかなきゃならないことは何かあるか？」
「特にないわ。由比ヶ浜さんも、大丈夫よね？」
「うん！問題ないよ。」
「それでは、不肖このわたくしがナビゲーションを務めさせていただきます。」
セレビスの言葉を合図に俺たちは空へ飛び立った。

第7話：仲間集め1

　というわけで飛行すること数時間。アルンに来てみたわけだが…
「すごい人の量ね。さすが央都なだけはあるわ。」
「人ごみに酔いそうだな。」
「あーっ！あそこのカフェ美味しそうだよ。みんなで行こうよ。」
　俺たちはあまりの人の多さに圧巻されていた。いや、一人別なものに注目してるみたいだが放っておく。
　それにしてもすごい人の数だ。道行くプレイヤーたちはみなしっかりとした装備に身を固め、慣れた足取りで居並ぶ店に入っていく。
「これだけ多いと人探しも大変そうだな…　どこか当てはあるのか？」
「はい。彼はよく「リズベット武具店」に行くそうです。ほかにもいくつかのプレイヤーショップの人たちとも顔見知りのようですね。それらの店に頻繁に訪れるというデータがあります。」
「だったら、まずはその武具店から言ったほうが早いか。案内してくれ。」
「かしこまりました。」

セレビスのナビゲーションに従って進むと、目的地には数分で着いた。その大きさはあまり大きくはなく、普通の店と同じくらいだった。
「ここがその場所ね。黒の剣士が使うというからもっと大きい店を想像してたんだけど･･･」
「こんな小さな店で悪かったわね。」
振り向くと、ハンマーをもったレプラコーンの少女が立っていた。
「もしかしてあなたがここのオーナーかしら?」
「そうよ。私はリズベット。ここで武器を作ったりして売ってるの。店はちっちゃいけど、そこそこ人気なのよ。」
「さっきの発言が気に障ったようならごめんね?別にゆきのんも悪気があって言ったわけじゃないから。ほら、ゆきのんも謝って。」
「･･･　わかったわ。先ほどの発言は撤回するわ。ごめんなさい。」
慇懃に頭を下げる雪ノ下にリズベットは苦笑すると、店の中へ案内してくれた。
「ここが私の自慢の店よ。見たところみんな初心者みたいだけど、うちは初心者向けの武器なんかはあんまりやってないから･･･　向こうがたぶんぎりぎり使えそうな装備かな。ちょっと支度を済ませてくるからそこでいろいろ見てて。」
そう言ってリズベットはカウンターの奥の部屋の消えていった。残された俺たちは

自分に合いそうな武器を探してみていた。
「あら、この弓。いいわね。レンジも長いし何よりデザインがいいわ。」
「ふーん。この小刀は風属性ダメージ追加か。俺のと合わしてみるのもいいかもな。」
「ヒッキー、小刀なんて使うんだ。意外。」
「じゃあ何を使うと思ってたんだ？」
「弓。できる限り離れて遠くから仕留めるチキンスタイル。」
「いつもはそうなんだがな。今回は早々に小刀のレアアイテムが手に入ったし、それを伸ばしていこうと思って。」
「チキン谷君はその腐った目だと遠くの敵が見えにくいのよ。それに、こんな目をした人が小刀を持って近づいてきたらきも・・・ 威圧感があるでしょう？敵が逃げて行ってくれるし好都合なのよ。」
「今、キモイって言いかけなかったか？」
「さあ？どうせいつものあなたの被害妄想でしょう。」
　こいつさらっと俺を被害妄想癖があるみたいに言いやがった。本当にどうしてやろうか。
「準備できたわよ。そっちは何かいいもの見つかった？」
「ええ。この弓とか特によかったわ。この猫の彫刻が気に入ったわ。」

「ああ。この小刀とかかなりいいな。黒くて、多すぎず洗練された機能美みたいなのが気に入った。」
「それならよかった。どれもあたしの自慢の品だからね。しばらくキープしとこうか？」
「ええ。お願いするわ。　ところでその服はどうしたの？ここの制服かしら？」
「ホント。その服わたしも欲しいな。どこで売ってたの？」
　二人が興味を示したのはリズベットの着るエプロンドレスのような服だった。
「これはオーダーメイドの一品よ。私専用なの。」
「へー、そうなんだ。デザインはどうしたの？」
「デザインは、ちょっと知り合いに頼んで作ってもらったの。みんなから好評でね、今度色違いのを作ってみんなでお揃いを着よう、なんて話にもなってるの。今度、この服を注文した店に案内しよっか？ほかにもたくさんの服が置いてあるし。」
「お願い！じゃあ、フレンド登録してくれる？ほかにもいろいろ聞いてみたいところあるし。」
「いいわよ。はい、今送ったわ。」
「ありがとー！これからよろしくね、リズちゃん。」
　こうしてみると、由比ヶ浜のコミュ力って異常だよな・・・　出会って1時間もしない

うちにフレンド交換するなんて俺にはいやがらせ行為にしか思えない。
「今あなたの考えてることには激しく同意するわ。他にあんなのができるのは姉さんぐらいよ。」
「ナチュラルに心を読むな！お前みたいなやつのほうがよっぽど化け物じみてる！」
「ご主人様、二人とも目だったり心だったりが化け物なんでそんなことはどっちでもいいです。それよりも早く本題に入りましょう。」
　急に飛び出してきたセレビスのおかげで何とか話題を軌道修正することに成功した。由比ヶ浜は少し頬を膨らませていたが。
「ああそうそう。で、用件てのは何？またキリトのやつが何かしでかしたの？」
「いや。その黒の剣士に頼みがあってきたんだ。」
「あいつに、頼み？」
「ああ。雪ノ下、話してもいいか？」
「ここは私が話すわ。」
　雪ノ下が一歩前に出てリズベットに今の状況を話した。ストーカーの単語が出た時点で少し眉をひそめていたが、
　付きまといの話になるとだんだん眉が中央によって行き、討伐部隊の話になると切れる一歩手前まで来ていた。

「そういうことなら任せなさい。私が責任もってキリトを連れてきてあげるから。他にも何人か心当たりがあるからその子たちも呼ぶわ。大丈夫。すぐにストーカーなんて黙らしてあげるから。」
「あ、ありがとう。」
「よかったね、ゆきのん！」
どうやらリズベットはかなり熱血漢のようだった。なにせあの雪ノ下が若干引いている。
ダメもとで来ていたんだが、予想外に話が進んで俺もセレビスも少し驚きを隠せない。
「よし、こうなったらさっそく準備しなきゃね。ここ最近、新生アインクラッドの階層攻略戦でモンスター倒せてないから鬱憤がたまってるの。これは腕が鳴るわね。」
憂さ晴らしに殴られる予定のストーカーたちに、合掌。
「みんなの武器、貸してみて。今から修理しとく。１，２時間もしたら仕上がると思うから、それまでの間は町を見てみたら？ゆいゆいに店の場所送っといたからそのナビゲーションピクシーに案内してもらいなよ。」
そう言ってリズベットは自分の作業に取り掛かり始めた。
「じゃあ、試しにそこ行ってみるか？」

「ええ。気分転換にはいいかもしれないわね。
「じゃあ、陽乃さんも呼んで４人で行こうよ。」
「えっ・・・　姉さんはちょっと・・・」
　雪ノ下は嫌がっているが、そんなことあまり言わないほうがいいと思うぞ。そして案の定、その後ろに黒い影が近づいていた。影は雪ノ下の肩を掴むと言った。
「ひゃっはろー。みんな元気―？じゃあさっそくみんなで行こうか？」
　ほらな。噂をすれば影、ってやつだ。

第８話：仲間集め２

「姉さん。なぜこんなところにいるの？今日は会議があるとか言ってなかったかしら。」
「うん。もう終わらせたよ。だから息抜きに雪乃ちゃんをからか・・・　一緒に買い物に行こうと思って。」
「そうは言ってもあまりにタイミングが良すぎはしないかしら。また何か企んでるの？」
「そういわれて私が素直に答えると思う？」
「二人とも相変わらずかよ。少しは和解したと思ってたのに全然じゃねえか。」
「私が姉さんと和解することが現実的に考えてあり得ると思うの？」
　そう言われると否定できない。もっとも、ここは現実ではなくゲームの中の世界なんだがな。
　雪ノ下が陽乃さんから一歩離れると、間をとりなすように由比ヶ浜が入った。
「陽乃さんは何かいい考えがありますか？その、ストーカーの件について。」
　由比ヶ浜にしては珍しく的を射た発言だった。こいつ、そういえば最初は敬語だったしゲームでは案外おとなしめのキャラなのかもしれない。

「そうね。今のところは証拠集めに奔走中ってところかしら。今は地道に証拠を突き付けることが一番確実な方法だから。あなたたちは別な案があるらしいけどどうなの？」
「俺たちはハイレベルプレイヤーを募ってＰＫを止めるつもりです。」
「あら、でのそれは前試してみてダメだったって雪乃ちゃんから聞かなかった？」
「ええ、聞きました。なので今回はトラの威を借りて敵の手を封じる作戦です。相手が自分より強いとなれば相手もそれなりの準備をしてきます。そしてその尻尾を取り押さえてストーカーの証拠として付き渡すのが俺の考えです。」
「君らしい作戦だねえ。つまりは直接戦闘する気はさらさらないってことでしょ？」
「そういうことになりますね。」
　由比ヶ浜や雪ノ下から冷たい視線を向けられたが無視して話を進める。
「だけど、彼らが逆上して君に襲い掛かってくるって可能性があるよ？君はまだ初心者のようだけど大丈夫なの？」
「ええ。ゲームの中で死んだところで現実の俺が死ぬわけでもありませんし。」
　その言葉に陽乃さんは目を細めてうなずいた。
「君がそれでいいなら私はそれで構わないよ。」
「では、陽乃さんも協力してもらえますか？」
「うん。いいよ。その代り、何かあったら君が守ってね。」

そう言って腕にしがみついてきた陽乃さんを雪ノ下が引き離す。
「公衆の面前でそんなにいちゃ付くのはやめてもらえないかしらデレ谷君。」
「照れてねえよ。」
「あなた、しっかりと鼻の下が伸びてたわよ。ここは感情表現がオーバーってことを知らないの？」
「ああ。そういえばケトシーを見るたびに手がワキワキしていたやつもいたっけな。すっかり忘れてたよ。」
「雪乃ちゃん、そんなことしてたんだ。意外と可愛いところあるじゃん？」
「逆に姉さんはここでもそのポーカーフェイスを崩さないなんて、本当に感情はあるのかしら？」
確かに、陽乃さんは今もこうして笑っているが、笑顔がどこか作り物めいている。
もしかすると、一番怖いのはストーカーより陽乃さんかもしれない。というか絶対にそうだろう。
「そんなことより！早くお買い物行こうよ！ね？」
場の雰囲気を変えるように由比ヶ浜が明るく言うと、セレビスも出てきてナビゲーションを開始した。
よく見ると体が細かく震えている。よほど怖かったんだろう。

「うう…　なんでご主人様のお知り合いは怖い人ばっかりなんですかあ…」
　周りがやばいやつばかりなのは同意するが、集まってくる理由なんてそんなの俺が知りたいぐらいだ。

　それから一時間後。
　皆が思い思いの買い物を楽しみ、俺（と、セレビス）が精神的にダウンし始めたころにやっと買い物は終わった。
「あの服屋の店主、もう二度と会いたくない…」
「私もです…　今後、あの方が半径１００メートル以内に接近したら警告音でお知らせしますね。」
「頼む。あ、あとＢＧＭはジョーズで。」
「了解です。はあ…」
　セレビスが完全に精神的にダウンしてしまった。俺も精神的にログアウトしたい。
「今日は楽しかったね！また今度あのカフェに行こう？」
「ええ。今度は姉さん抜きで奉仕部の三人でね。」
「ひどいなあ。じゃあ、今度比企谷君と二人で…」
「あれ？ヒッキーがいない。どこ行ったんだろ。」

「まさか、逃げ出したんじゃ・・・　ずいぶん疲れた様子だったからね。」
「たぶん店にいるんじゃないかしら。それか潜伏スキルを使ってそこら辺に隠れているか。たぶん、今は人ごみに紛れてこっそりとフェードアウトしようとしてるところかしら。」
怖い。完全に行動が読まれてる。こいつの思考を読む能力はここでも健在のようだ。もはやチートレベルだと思うが。
「まあいいわ。彼は放っておきましょう。ところで姉さんは作戦会議に来る？すぐそこでやる予定なんだけど。」
「うーん。参加したいんだけど、レポートが残ってるしなあ。」
「だったら無理ね。それじゃあ由比ヶ浜さん。行きましょう。」
一瞬に躊躇もなく陽乃さんを切り捨てると雪ノ下は店へ歩き出した。陽乃さんはそれを笑って見送ると、俺のほうへ向き直った。
「じゃあ、雪乃ちゃんをよろしくね。」
まるで俺が見えてるかのような行動に驚いていると、陽乃さんは雪ノ下とは反対へ歩き出した。
１人残された俺は、雪ノ下の周辺を警戒するようにして店へと帰った。
そんな中、人ごみの中で不審な動きをする男を見つけた。

気づかれないようにそっと見てみると、風にたなびみめくれたローブの下の腕には、悪趣味な笑い顔の棺桶のタトゥーが彫られていた。
（いかにもって感じだな…　さては陽動か？）
そのまましばらく監視を続けると、男は人ごみに紛れて消えていった。
そして後には楽しそうに話す雪ノ下たちと、俺の中に嫌な予感だけが残されていた。

第９話：空中遭遇戦

店に着くと、リズベットが外に出て俺たちを待ってくれていた。
「お帰り。買い物はどうだった？」
「とても楽しかったです。わざわざ気を使っていただいてありがとうございます。」
「元気になってくれたんならそれでいいよ。せっかくゲームやってるのに楽しめないなんてもったいないじゃん？」
「…　それもそうですね。」
「でしょ？だからストーカーみたいなやつらが嫌いなの。せっかくゲームを楽しもうとしてるのにそれを邪魔しようとするなんて本当にひどい連中よね。」
こうしてみるとはリズベットが本当にこのゲームが好きなんだと実感させられる。そして雪ノ下もかすかに同意を示している。由比ヶ浜もぶんぶん首を縦に振っている。…　やっぱりこいつは犬だな。
一方も俺はというと、実のところまだそこまで愛着がわいてない。なにせこちらはまだ初めて一日目の身だ。
これから楽しんでいこうというところにＰＫに出くわして今こうしてストーカーの

一件に巻き込まれている。
どうやら俺はゲームの中でも息抜きはできない身らしい。
こうなってくると、俺がこのゲームを楽しめる日は来るのかと考えてしまう。うん。無理そうだ。
この一件が終わったらとっとと引退するかな・・・　アミュスフィアは小町にでもやればいいし、手に入れたアイテムでレアなのはディズティたちに分ければいい。
「おーい。８００００?大丈夫ー?」
「あ、ああ。少し考え事をしていただけだ。」
「そういえば君も開始早々ＰＫにあったんだって?」
「ああ。何とか撃退したけど。」
「そういう意味じゃあ、君も被害者の一人かもしれないね。」
「単純に俺が不幸なだけだよ。システムエラーを引いたのがそもそもの原因だし。」
「そうやって自分にばっかり責任を集めてるけど、そこは普通にＰＫに怒ってもいいんじゃない?そうしないと楽しめないよ?」
「・・・　考えておく。」
俺が答えをはぐらかすとリズベットはため息をついた。
「ま、今から会いに行くやつも何でも一人で背負い込もうとするやつなんだけどね。も

しかしたら、８００００のなかで何か変わるかもしれないよ？」
「ああ。そうかもな。」
嘘だ。この程度で俺の中の信念はそうそう変わらない。
ＰＫも疎まれる行為ではあるが、このゲームでは禁止されていない。一方のストーカーは付きまとい行為の禁止がなされているからには当然アウト。
だから今回は雪ノ下のために動くことにした。それだけだ。
リズベットはこの話についてそれ以上何も言おうとはしなかった。
「それと、集まる人が増えすぎたから場所が店じゃ手狭になっちゃって。いまからみんなで移動するからついてきて。」
「え？ちょっと待ってくれ。いったい何人集まるんだ？」
「そうだね・・・ざっと１０人ぐらい？たぶん、これからもっと増えるよ。下手したら今の倍以上は来るかも。」
「倍以上って・・・」
雪ノ下も予想以上の大ごとになって少し驚いている。俺だって集まって４、５人がいいところだと思ってたのに。
「やったね。これでいっきにストーカーを倒せるじゃん！よかったね、ゆきのん！」
「え、ええ・・・」

由比ヶ浜だけが無邪気に笑って雪ノ下が顔を引きつらせる。
「どうするの？あなたの作戦では少数精鋭で敵をかく乱するつもりだったようだけど。」
「いや、人数が多いに越したことはない・・・　はずだ。それよりも、裏切りやスパイの可能性のほうが怖い。」
「それもそうね・・・　やはり手の内をすべてさらすのは控えたほうがいいわね。」
「それなら、私が参加するプレイヤーの素性を調べましょうか？その中で安心な人にだけ本当の作戦を知らせるのがよいのではないでしょうか。」
「じゃあそれで頼む。それと、雪ノ下と由比ヶ浜は警備のローテーションを組むのを頼む。」
「わかったわ。でもあなたは何をするの？」
「黒の剣士は顔が広いらしいから、その伝手を辿って何個かギルドを調べてみる。大まかな目星はセレビスがつけてくれてるからそこからいくつか絞って調査すれば手掛かりは得られるはずだ。」
　俺がそう言うと由比ヶ浜は少し心配そうな顔をした。
「大丈夫？それってヒッキーが結構危ないんじゃ・・・」
「安心しろ。いざとなったらすぐ潜伏スキル使うし、あとは黒の剣士が何とかしてくれるはずだ。」

「いっそすがすがしいまでの他力本願ね。それでこそチキン谷君の面目躍如よね。」
「ちょっとかっこいいところがあるかなって思ったらすぐこれだよ…　だからヒッキーは友達ができないんだよ。」
　散々な言われようだ。だが、俺が参戦しても足を引っ張るだけだから何もしないのが最善手だ。物事には役割というものがある。
　俺はひたすら、卑屈を貫いて情報を集めるだけだ。
「そろそろ話し終わった？そろそろ行くわよ。」
「そういえば、どこに行くんだ？まだ場所を聞いてないんだけど。」
「あそこよ。」
　リズベットが指さしたのは真上だった。つまりは空の上。
「世界樹の頂上か？だったら納得――――」
「違う違う。あれよあれ。」
　言われてよくよく目を凝らしてみると、そこには空に浮かぶ黒い鉄の城があった。
「あれは…　？」
「新生アインクラッドよ。あそこにしりあいが借りてる部屋があるから、そこで会議をすることになってるの。」
「あ、あそこまで、飛ぶの…　？ちょっと高すぎない？」

「大丈夫よ。今までみんなちゃんと飛べてたから。ほら、早く羽出して。」
由比ヶ浜が涙目でこっちを見てくるが俺にはどうしようもない。諦めろ。
「それじゃ、行くわよ?」
リズベットが飛び始めたのを見て、雪ノ下も後ろについて飛んだ。あいつ、飛行がめちゃくちゃうまいんだよな。アルンに来るまでもアクロバット飛行を披露してたし。ただしすぐにばてるのが難点だが。
「ほら、由比ヶ浜。行くぞ。さっきまで飛べてただろ? いまさら何を怖がってんだよ。」
「うう・・・ ええーいっ! 怖くない怖くない下さえ見なければ大丈夫・・・」
「見ろよ由比ヶ浜。人がまるでごみのようだぞ。」
「えっどんなかんじ? って高っ! 怖いよ助けてー!」
空中で立ち往生した由比ヶ浜を放っておいて俺はリズベットたちの後を追った。
少しは高いところになれろ。雪ノ下なんてアクロバット飛行しながら魔法まで撃ってきてるぞ。って、魔法?
「ちょ、まて雪ノ下! なんで俺ばかり狙って_____」
「あら、間違えたわ。後ろから天然温泉の源泉のような視線を感じたから。」
「どんな視線だ! あと、間違ってたと思うなら魔法を詠唱するのをやめろ!」
こうしてる間もずっと打ってくる魔法にをぎりぎりで避けながら、俺は周囲の索敵を

行なっていた。
『敵感知、３人か・・・　少し不利だが、やるしかなさそうだな。』
　雪ノ下は俺をぎりぎりで外れるように魔法を追手に向けて連発していたが、一向にあたる気配がない。
　相手との距離が開きすぎてすぐ避けられてしまっている。
「『ブラインド』っっ！」
　周囲に煙幕を張るが、相手を巻き込めていない。
「食らえっ！」
　懐から小刀を取り出してふるうと、熱風が巻き起こり煙幕を敵へと吹き飛ばした。
　相手は慌ててよけようとするが、空中で立ち往生していた由比ヶ浜が機転を利かせて後ろから冷気の風を押しやって逃げ道をつぶした。
　そこで横に逃げようとしたところをリズベットと雪ノ下が狙い撃ちした。
「ぐっ!?こいつら・・・」
「ちいっ！いったん引くぞ！」
　そのまま離脱を図る二人を、由比ヶ浜の氷と俺のデバフで足止めする。
「観念しなさい。あたしは今そこそこ切れかかってるからね。」
「しっかりとリーダーの居場所を吐いてもらうわよ。」

二人の圧倒的威圧感の前に追手たちはなすすべもなく捕まえられた。
これで一安心かと思ったその矢先、
「ヒッキー!・後ろ!」
「まずいっ!?油断した!」
忘れていたもう一人が後ろからタガーで首元を狙ってきていた。とっさに避けれず、俺は無我夢中で魔法を繰り出した。
すると、来るべき攻撃は通らずに俺の手元には確かな感触があった。いける!
「反撃だあっ!」
カウンターに首筋を狙って一振りすると重たい感触とともに相手の首が飛び、青白い炎となった。
「これでホントに全員か?」
「ええ。それにしても大戦果ね。一気にボスへと近づくことができるわ。」
「くっそ・・・ てめえら、プレイヤーを強制的に連行するとおれが運営に言えば即座にBANされっ・・・ ひいいっ!!」
リズベットに胸ぐらをつかみあげられ、追手は情けない悲鳴を上げた。
「あんたねえ。ストーカーしといてよくそんなことが言えるわね。なんなら今ここで話させてもいいのよ?」

「落ち着いて、リズベットさん。そんなに怒っては相手の思うつぼよ。」
　そして捕まえた追っ手を絶対零度の眼で見下した。
「これは任意同行よ。私たちが捜査のためにあなたたちから話を聞くために自分の意志でついてきた。そうでしょう？」
「は、はいいいいいっっっ！」
「よろしい。ではついてきなさい。逃げたら承知しないわよ。」
　精神的に完全に上に立った雪ノ下に逆らうこともできず、追手たちは反抗せずおとなしくついてきた。
「あの娘、いったい何者・・・？」
「うう・・・ゆきのんがこわいよ・・・」
「私もです・・・なんですかあの人本当に人間なんですか擬態したボスモンスターって言われたほうがよっぽど納得できます。」
「言うな。俺もだ。」
　皆が雪ノ下におびえ、絶対にからかうのはやめようと心に誓った瞬間だった。

第１０話：作戦会議@ＡＬＯ

「さて、あなたたちのリーダーについて洗いざらい吐いて貰いましょうか。まず、あなたたちのリーダーの名前を教えなさい。」
「それがその…　オレたちもよく知らないんです…　知り合いに勧誘されて入っただけで、可愛い女の子と会えるってことしか知らなかったんです。」
「会うって言うか、ただ追いかけまわしてるだけじゃない。それで不快に思う人がいるってわからないの？」
「すみませんでした…」
「今は謝罪は求めてないわ。それより、リーダーの名前を知らないって本当なの？フレンドリストに登録したりなんかはしてないの？」
　男たちの謝罪を一蹴した雪ノ下は男たちをさらに質問攻めに追いやった。完全に検察官と追い詰められる被疑者の格差が出来上がっていた。もうどっちが悪者かわからなくなっている。
「ゆきのん、今はそこらへんにしておいて…　もうすぐ着くみたいだから。」
「…　わかったわ。」

こうして犯人たちの尋問は（幸運にも？）中断された。由比ヶ浜を地獄で天使を見たかのような目で見る犯罪者たちに、ストーカーの生産過程を見せられてるようで少し気持ちが悪かった。これだから天然は・・・

こうして着いたアインクラッドは見た目と違い、中には空も緑もある大迷宮と化していた。

当然ＮＰＣたちも多く住んでおり、アルンほどではないにせよ比較的にぎわっていた。

そんな中で案内されたのは知り合いのプレイヤーが借りている一室だった。

なんでも。酒などを多く保管しておりシアターまでついているのだという。

「クラインー？入るわよー？」

「おう。いいぜ。今回の依頼主をさっさと通してくれ。」

そう言って入った部屋には１０人ぐらいのプレイヤーがいて、この部屋の主らしき赤いバンダナを付けた侍風のサラマンダーが手にグラスを持って立っていた。

「お前らが遅いから先に開けて飲んじまったぜ。ところで今回の依頼主はッと・・・

おおっ！意外と別嬪さんじゃねえか！そりゃあまあストーカーもつくだろうよ。」

「ちょっとクライン？いまはそういう冗談は控えてくれる？」

「おお。悪いな。ついいつもの癖で。」
「あんたは全く…　キリトはどこにいるの？」
「ん？ああ。キリの字ならあっちにいるぜ。アスナたちと一緒にいる。」
「ありがと。おーい、キリト――！」
　リズベットの呼びかけに振り返ったのは、黒いコートを着たスプリガンの少年だった。
「引率ありがとうリズベット。彼女たちが今回の依頼人？」
「そうよ。それとこいつらがついさっき捕まえたストーカーの一味よ。後でたっぷり事情を吐いてもらわなきゃならないし、別室で私が監視してるわね。」
「大丈夫？相手は男が二人だけど…」
　由比ヶ浜の心配そうな様子に、キリトは笑って受け流した。
「大丈夫だよ。リズベットはそこまでやわじゃないから。むしろ締め上げて恫喝するぐらいするんじゃないかな？」
「こらあ！また適当なこと言って。私はそんな手荒な真似はしません。少し事情を聴くだけよ。」
「なら大丈夫か。でも、油断はするなよ？」
　キリトの忠告にリズベットはうなずくと、部屋を出て行った。

そして俺たちのほうを振り向くと顔を見回した。
「俺がキリト。一部じゃ『黒の剣士』なんて呼ばれてる。よろしく頼む。」
そう言って差し出した手を取り、雪ノ下も自己紹介をした。
「私が今回の依頼人のゆきのんよ。今回は招集に集まってくれてありがとうございます。」
「あっ、わたしがゆいゆいです。ゆきのんの知り合いで付き添いできました。ゆきのんのこと、よろしくお願いします。」
「ああ。これだけ集まってくれたことだし、もう安心だと思うよ。
ところで、君は？」
俺に気づいたキリトが俺のほうに向きなおった。リズベットはこいつを俺と似ていると評したが、意味が分からない。こいつは友人に囲まれていて、俺は万年ボッチ。どこに共通点があるというんだか。
「俺は８００００だ。同じく付き添い。」
ぶっきらぼうに言ってこれ以上の会話を暗に拒む。
キリトは困ったように笑うと俺に手を伸ばした。
「よろしく。８００００。」
「…ああ。彼奴らを頼む。」

俺たちが互いに握手を交わして対策会議は始まった。
「まず、ここに居るメンバー全員の紹介をするな。
このバンダナつけたサラマンダーがクライン。性格は知っての通りだから女子二人は近付かない方がいい。」
「おいおいキリの字!そりゃあないだろうよ!俺はこれでもかなり紳士だぜ?さっきのストーカーなんかと一緒にされたら困るぜ。」
「そう言うならまずは発言から見直した方がいいと思うぞ…」
「そんなことしなくてもオレの清い心はしっかり伝わってるさ。なあ８００００?」
「頷いたら人間として何か大事なものを捨てることになりそうだから否定しとく。」
ガックリ肩を落とすクラインを見て何故か戸部の姿が重なった。戸部の将来がこんな感じか。それは材木座も同じかもしれないが。
「えーと。こっちにいるバーテンダーがエギル。リアルでも店を経営してる。ぼったくり商売人。」
「余計なことは言わなくて良い。改めて、エギルだ。よろしく頼む。」
「外国人プレイヤーの方ですか。日本語がお上手ですね。
よろしくお願いします。」
雪ノ下のマトモな大人への対応にクラインは少し唇を尖らせていたが雪ノ下にはス

ルーされた。
「それとこっちにいる水色の髪のケトシーがシノン。弓でなのに数百メートルの超長距離射撃をするゲテモノスナイパー。」
「ゲテモノは余計よ。あなた、何かひとつ余計な事を言わないと気が済まない質なの？」
「普通に褒めただけだろ？それに嘘は言ってないんだし。」
二人は仲が良いのか皮肉ってる割にはまんざらでもない様子で応酬をしていた。
それを見ていた雪ノ下の手がワキワキしているのに気づいた由比ヶ浜は慌てて雪ノ下の服の袖を掴んで暴走を押しとどめていた。…雪ノ下。少しは場所を選べ。
「もう、お兄ちゃん？ゆきのんさん達困ってるでしょ。早く紹介してあげて。
まったくもう…。わたしはリーファです。キリトの妹です。兄がお世話になります。」
「いや。こちらこそよろしく頼む。雪ノ下…ゆきのんもあんなんだしな。」
視線の先にはもう一人のケトシーの少女に向かおうとする雪ノ下を必死に押しとどめる由比ヶ浜だった。本当にあいつら何やってんだ。
「リーファちゃん助けて下さい～！」
雪ノ下の魔の手から逃れて来た少女は肩に小さなドラゴンを乗せていた。
「シリカちゃん。あの人が怖いのはわかるけど逃げたらこっちに来ちゃうから出来れば

あっちに行って欲しいなって…」
「うわああん！リーファちゃんの裏切り者！」
シリカと呼ばれた少女は家具と家具の隙間に引き籠って頭を抱えて縮こまってしまった。
それを見た雪ノ下は妙にホッコリした顔でその様子を見つめていた。まぁ、猫が狭い所に入ってるのって可愛いんだが…
「なんというか、ゆきのんさんは少し変わった人だね……」
「いや、そこは素直に猫好きの変質者と言っていいぞ。あいつのアレはもはや病気の域だ。」
「やっぱりそう思いますよね…。いつもあんな感じなんですか？」
リーファが苦笑しているとついに由比ヶ浜の拘束から解き放たれた雪ノ下がシリカをモフろうとしてドラゴンに阻まれていた。
「いや、流石にいつもは違う。なんというかストーカーに直接会ってストレスが溜まってたんだろ。」
「だとしてもシリカちゃんは災難だね……」
そう言っている俺たちの目の前で雪ノ下がドラゴンに引っ掻かれてた。
それでもゾンビの様に前進しようとする雪ノ下から俺達はは一歩は離れた。

「なあ、そろそろ止めてやらないと本格的に事案だぞ。ほら、シリカも困ってるだろ。」
俺が雪ノ下を引っ張ってシリカから離すと、カオスな部屋の中で唯一落ち着いているウンディーネの少女のもとへと逃げ去った。
こうしている間にも痴話喧嘩をするキリトとシノンの間をあたふたする由比ヶ浜やテキトーな扱いにやさぐれて自棄飲みしてるクライン、黙々とグラスを磨くエギルに明後日の方向に現実逃避するリーファなど場がだんだんとカオスになって来る。
そんな中、おそらく最後の常識人であろう少女に声をかける
「俺、もう帰って良いか？」
「うーん。出来ればいてくれた方が有り難いんだけど…」
「そうは言ってもこの状況で会議も何もあったもんじゃ無いだろ。」
「それもそうね。じゃあ、ちょっと耳塞いでてくれる？」
何をするのかわからないがおとなしく耳を塞ぐ。
何をするのかと見ていると少女はレイピアを抜いた。そして、
「良い加減に…しなさい！」
キリトに向けてソードスキルを放った。
当然アンチクリミナルコードに弾かれるが、その大音響に皆静まり返る。
少女はそれを見て頷くとにこやかにこちらを見てきた。

その満足気な表情に俺はそっと目を逸らした。

第１１話：やはりこの人選は間違っている

逃げよう。俺は割と本気でそう思った。

アスナの一喝の前に皆が怯えて動きを止めた中、俺は一人足音を忍ばせて撤退を図った。

「うん?·なに逃げようとしてるのかな８００００君?·」

あっさりバレた。いや、まあ、バレないと思ってはいなかったがこうもあっさり捕まるとも思ってはいなかった。

「セレビス!·助けろ!·麻痺状態なり移動阻害なりなんなりかけて逃がして!·早く!·」

「無理です!·あの人なんて呼ばれてるか知ってますか?·バーサクヒーラーですよ、ＡＬＯでも五指に入るプレイヤーですよ??·私はまだ死にたくないです!·」

こいつ使えねえ!·そう思った俺はセレビスに頼るのは諦めてひたすら扉へと走った。扉に手をかけて飛び出すと、何かにあたって跳ね飛ばされた。

「ってて……」

「すまない、大丈夫か?·」

「ああ。大丈夫だ。」

部屋に入ってきたのは高身長の侍装飾のエルフだった。
「ところで、ここがゆきのん氏のストーカー対策会議の会合場所で会ってるか？」
「そうだ。あそこにいる黒髪のケトシーがそいつだ。ところで、お前は？」
「ああ。名乗りが遅れたな。我こそは剣豪将軍、足利義輝！縁あって参上した。」
……。

ものすごく嫌な予感がするが気のせいだろう。だいたいあの材木座がこんなイケメンなはずがないし…
「そういえば、ゆいゆい氏もいると聞いたが彼女が誰か教えてくれるか？」
「お、おう…。いまゆきのんを羽交い絞めにしてるのがそうだ。……　俺はちょっと急用を思い出したから抜ける。じゃあな！」
これ以上この場にとどまりたくない要因がさらに一つ増えた。しかし、俺の腕が何者かにがしっと掴まれた。後ろを振り返らなくてもだれかわかってしまう。さて、どうしたものか…
「８００００くん？なに一人だけ逃げようとしてるのかな？」
「ほら、アスナ一人でも今みたいに場を収めれるんだからきっと大丈夫だって。俺はいるだけで場の空気を乱しかねないから早めに退散したほうがいいというか、常識人枠は一人で十分だし…」

俺の言葉にアスナは能面のような表情でにっこり笑った。
「死なばもろとも、だよ?」
「嫌だ!放せって!なんでヒーラーなのにこんなに力強いんだよ!?だ、誰か、助けてくれ。」
「ふむ・・・。今の話を聞くにお前、さては八幡か?」
突如会話に乱入してきたのは足利義輝――もとい、材木座だった。
「さあな?誰だ八幡って。そんな目が腐ってそうな名前のやつは知らん。」
「８０００君、誰もリアルの方の八幡が目が腐ってるって言ってないわよ。」
雪ノ下の冷静な突込みも今回は無視して必死に逃亡を図る。こんなグダグダなメンバーだけでなく材木座まで加わるなんて想像しただけで怖気が走る。
「いいか義輝。ここはお前みたいな中二病が出る幕じゃない。引き返すなら今のうちだぞ?」
しかし材木座は俺の忠告を鼻で笑うと声高に宣言した。
「安心するがいい。こう見えて我はＯＳＳを二つ保有し、道場を３つ構えるハイランカーだ。だから安心して頼るがいい。」
「なあアスナ、あいつの言ってること本当か?聞いていてすごく痛々しいんだが。」
「大丈夫。彼の言ってることは全部本当よ。確かキリト君と２回戦って２回とも引き分

けてたよね？」

その言葉に室内の皆の視線がキリトに集中するが、キリトは相変わらずの表情でうなずいた。

「ああ。確かにあいつは強いよ。ユージーンの戦ったらきっと義輝のほうに軍配が上がるだろうな。俺だって引き分けに持ち込むのがいっぱいだったから。」

キリトの言葉に皆は絶句した。黒の剣士の強さを知っているものからすればよほどのことなんだろう。そして材木座がそれほどのことをできるほど強いということは、今のところＡＬＯで上位五人に入るプレイヤーのうち三人がこのチームに所属していることになる。ここまで大きくなりすぎると逆に動きづらいかもしれないな。

「義輝。悪いがお前は別動隊だ。今ここでパワーバランスを崩すと冗談抜きにギルド対俺たちの全面戦争になりかねない。ここは一旦見掛け上は戦力を分散させた方がいい。お前は良くも悪くも目立っているから陽動には最適だろ。そこでお前には下部組織と思われるところに行って話をつけてきてほしい。お前が動けば門下生たちも動く。そうすればお前たちの陰に隠れて俺たちが行動しやすくなる。引き受けてくれるか？」

材木座は一瞬の黙考ののち快諾してくれた。

「うむ！よかろう。我の弟子らが力、見せてくれる！」

なにはともあれ、大まかな作戦のめどは立った。後はリズベットが引き出してくれた

情報をもとに攻撃対象を絞って狙い撃ちにしたらいい。証拠を押さえたら後は陽乃さんがどうにかしてくれるだろう。
「それじゃあ、オレたちはどうしたらいいんだ？話しぶりからしてばらけて動いた方がいいんだろ？」
「クラインの言うとおりだ。ここはまず、シリカとリズベットでターゲットの誘導と尋問。そして後ろの武力要因にクラインとエギル。シノンとアスナはゆいゆいとゆきのんの警護。セレビスとユイは外部からリアルでのつながりや相手の動きをモニタリングしてくれ。リーファはシルフのトップたちから自情報収集を頼む。」
「ところで８００００はどうするんだ？」
「俺とキリトはリーダーに直接交渉に行く。たぶんかなり危険だからこの二人で行った方が一番安全だろう。」
「そうね。あなたは逃げ足と小手先の小細工は速いものね。」
　チキンなのは百も承知だがそれ以外に出る幕がないんだよ！いざ戦闘になったら現場指揮はキリトたちがとるだろうし、俺が何もしてなかったら絶対後でいろいろ陰で言われる。
「まあ、ヒッキーがやる気になってくれたならそれでいいじゃん。ね？」
「・・・　それもそうね。最初のころに比べたらだいぶんましになってきたわ。」

「それじゃあ、今日は一旦これで解散でいいか？何かあったらどこかの掲示板…　は、あぶないか。」
「だったらうちの店に来るといい。ダイシーカフェって店なんだが、御徒町にあるんだ。来れるか？」
「俺たちは千葉に住んでるんで、ぎりぎりセーフです。」
「じゃあ、次の日曜日にダイシーカフェ集合で。それでは、今日のところは解散で。お疲れさまでした。」
　この言葉を合図に三々五々部屋を出て行ったりログアウトしたりと皆が帰っていく。
「じゃあ、俺たちも帰るか。」
「ええそうね。…　ところでチキン谷君。」
「なんだ？俺の名前は比企谷だ。」
「……　その、今日はありがとう。感謝するわ。」
　雪ノ下は顔を少し赤く染めるとそのまま部屋を出て行ってしまった。
　…　あいつ、急にどうしたんだ？
「それはまた今度ゆきのんにでも聞いてみたら？じゃあね、ヒッキー。また学校で。」
「お、おう。またな」
　由比ヶ浜も部屋を出ていくと、あとには俺一人が残された。

「さて、今日は疲れた。ログアウトっと。」

俺は迷わずログアウトを押し、現実へと帰還した。家に帰ったら今日は親がいないから小町の分も夕食を作らなきゃな。

今日の俺は、ゲームを終えた後の感覚が、なぜか少しだけ気持ちがよかった。

第12話：寄り道ショッピング

翌日、俺は雪ノ下たちと落ち合って一緒にダイシーカフェへ行くことにした。陽乃さんもついて来ようとしたのだが、レポートに忙殺されて渋々撤退していったらしい。俺はほっと胸をなでおろした。

それからしばらく電車に揺られると目的地が見えてきた。電車に乗っている間、俺と雪ノ下はずっと読書をしていた。由比ヶ浜も最初は景色についていろいろ言っていたが、三週目のビル群に入ったあたりで諦めた。それからはずっとスマホをいじって会話は一切なかった。こうしてみると奉仕部の当初の存在意義について考えて少し泣けてきた。やがて目的地に着くと、先ほどまでとは違い、皆も少しは興味があるかのようにあたりを見渡していた。俺はあらかじめ聞いておいた場所に向けて歩き始めたが、すぐに雪ノ下たちがついてきていないことが分かって振り向いた。

「おい。早くいかないと主賓の俺たちが遅れて気まずくなるだろうが。何してんだ？」

「ヒッキー、見てこれ！この服に合うと思わない？」

「……」

雪ノ下はショーウィンドウに飾られた猫の置物に釘付けになっている。この調子だ

としばらくは動きそうにないな。
「ねえ、今からここで少し買い物していこうよ。せっかく東京に来たのに何も買わないなんてもったいないしさ。」
「・・・　そうね。私も同意するわ。」
　雪ノ下は置物から目を離さずに同意した。どんだけそれ欲しいんだよ・・・
「・・・　じゃあ、1時間だけだぞ。あと、念のために雪ノ下の方には俺が付いて行く。由比ヶ浜もできるだけ離れないようにしろ。」
「分かった！じゃあ、またここで待ち合わせで！」
　そう言って由比ヶ浜は走り去った。
「雪ノ下はこれからどうするんだ。由比ヶ浜のやつはブティックを探すみたいだから3階だと思うぞ。」
「じゃあ、ひとまずはこれを買ってから3階に移動しましょう。・・・　ところで、あなたはなぜこの店について把握してるのかしら？」
「昔、小町ときたことがあるからだよ。来たのは1年前だからそこまで変わってないだろ。」
「そう。じゃあ、今日は荷物持・・・　エスコート役、お願いするわね。」
「おい今荷物持ちって言いかけただろ。しかもわざとらしく。」

「気のせいよ。行きましょう。」
雪ノ下は猫のドールを取ってレジへと歩いて行った。俺はため息をついてその後を追った。
それからしばらくの間、俺は馬車馬のようにこき使われた。具体的には両手の筋肉が一日でジム通いしたかのように痛くなった。しかも途中から由比ヶ浜の分まで押し付けられ、負担はさらに倍増した。
やがて約束の1時間後になって、俺は荷物を二人に返そうとすると、不思議そうな顔をされた。
「えっ？持っててくれないの？」
「え？もう持てないの？」
「いや、お前らちょっと待て。これだけの荷物抱えてどうやって帰るつもりだったんだよ。えっ？もしかして俺がずっと持ち続けてくれる算段でいたのか？」
「うん。そうだけど？」
「よし、お前らの言いたいことはよくわかった・・・　馬鹿じゃねえの!?ねえ、お前ら俺と駅で別れたらどうするつもりだったんだよ？それだけの荷物一人で持つのか？ここゲームじゃないんだよ？リアルだよ？もう一度聞いていい？お前ら。この荷物どうするんだ？」

「どうするって、退きたがり君。あなたがわたしの家まで送ってくれるんじゃないの？」
「そ、そうだよ！ヒッキーに送ってもらえば万事解決じゃん！」
「雪ノ下のその考えもどうかと思うがストーカー対策もあるしまだいいだろ。問題は由比ヶ浜！お前まで送ってやる義理はないだろ!?」
　俺の悲鳴に何人かがこちらを振り向くが、今はそんなことも気にしていられないほど疲れていた。
　しかし、由比ヶ浜は似合わない腹黒な笑みを浮かべた。
「ヒッキー、そんなこと言ってていいの？このことが小町ちゃんに知れたらまたいろいろとダメ出し食らうんじゃないのかな？」
「だからどうした？似合わない腹黒キャラ演じなくても中身は変わんないんだから諦めろって。全然似合ってないぞ？」
「わざわざ二度言うなし！でも、私から小町ちゃんに伝わったら今度はそこからあちこちに伝わっちゃうよ？陽乃さんとかいろはちゃんとかさいちゃんとかに。」
「ぐっ!?」
　たしかに、小町の情報網は侮れないものがある。それと、あいつは俺の弱みを意図的に流している節もある。たしかに、今ここで逆らうのは危険かも知れない。
「…分かった。ただし雪ノ下のあとだぞ。」

「ありがとヒッキー！あっ、一つ買い忘れてたものがあったから買ってくるね！」
「ふざけろ。」
俺は由比ヶ浜の襟首を掴んで引き留めた。

第１３話：作戦会議@ダイシーカフェ

「あのー。すみません。ダイシーカフェてここであってますか？」
「ああ。お前達が８００００達だな。ようこそ、俺の店へ。もうみんな来てるぞ。」
　大柄な黒人（恐らくはエギル）に連れられて店へ入るとすでに皆が揃っていた。するとスーツを着崩した男性が話しかけてきた。バンダナからしてクラインだろう。
「ああ。やっと主賓の到着か？遅かったな…って、その荷物はどうした!?」
「聞いてくれるな…　。それよりこの荷物はどこに置いたらいい。もう手が震えてヤバイ。」
「お、おう、こっちに…重い！なんだこれ何が入ってんだよ⁉？」
「気を付けてちょうだい。中に陶器製の猫の置物が入ってるのよ。」
　やはりか、とため息をつく俺と雪ノ下を交互に見てクラインは絶句した。
「お前…。何か辛いことがあったら言えよ？少しでも助けてやるからよ？」
「ああ。だったら由比ヶ浜を家まで送ってやってくれませんか？雪ノ下まで送ると少し遅くなりそうなので。」
「それぐらいならお安いご用だぜ。俺は可愛い子を乗せるために車を買ったようなもん

だからな！」

なるほど。つまり車種はハイエースか。ダンケダンケされないうちに逃がしたほうがいいかもしれない。

などとろくでもない事を考えて時間を潰しているとやがてみんなが集まったようだ。司会は唯一の常識人のアスナに任された。

「それじゃあ、これからストーカー対策会議を始める。みんな、まずは今日集まってくれてありがとう。雪ノ下さんから何か一言お願い。」

「今日はわざわざ集まってくださってありがとうございます。私もできる限りの事をするので、協力をよろしくお願いします。」

まるでパーティーみたいだと思いながら手をたたく。するとエギルが景気づけにとケーキを持ってきた。本当に何のパーティーだ？

そのままなし崩しに宴会ムードで皆食べたいものを食べて話したいことを話してひと段落すると、キリトが本題を切り出した。

「よし、皆んな会話もひと段落したし、本題に入ろう。

だけどその前に、何人か協力に立候補してくれた人がいるから、紹介して皆んなから承諾を取りたいんだけど、構わないか？」

キリトは俺の方を見て、俺の反応を待った。

見るだけたら構わないと頷くと、早速呼びに行った。
「えーと。一人目が、シノンがＧＧＯで見つけときてくれた人だ。名前はサイレント。大人の女性だからきっと信用できると思う。じゃあ、入って来てください。」
「あ、はい。失礼します。」
あ、なんか聞いたことある声だ。具体的には酒とラーメンと少年漫画が好きな三十路に近い国語科教員で奉仕部の顧問の傲岸不遜な先生……
「初めまして。サイレントです。年は二十代でリアルでは教員をやっています。本名は、平塚静と言います……⁉?」
あっ、こっちに気づいた。とりあえず笑顔で無視を決めこもう。触らぬ神（祟り神）に祟り無しだ。くわばらくわばら。
「あれっ?平塚先生⁉?どうしたんですか。まさか平塚先生が協力者ですか?だったらすごく心強いです!ね、ゆきのん?」
…由比ヶ浜。少しは空気読めよ……。

第１４話：とある国語科教師の罪と罰

「・・・？だ、誰だい、君は。私は君みたいな子は知らないぞ？人違いじゃないかい？」

震え声で返されても説得力皆無なんだが・・・。いや、説得力云々は今更か。年齢サバ読みする時点でもう信頼は傾いている。

「・・・先生。往生際が悪いですよ。さっさと諦めて白状して下さい。俺たちとの関係とか、諸々の嘘とか。」

俺の嘘という単語にぎくりと反応するところを見るとどうやらここでも年齢をサバ読みしていたようだ。

まあ、ゲーム内だし別にそれは良いんだが、この後に及んでもまだ隠し通そうとしているのはちょっとどうかと思う。

「いや、なんだ。その、私だって少しはゲームぐらいしたっていいだろう？オフ会にわざわざ年齢を持ち出すのは野暮というものじゃないかと思うんだが・・・・・・・・・・。」

「俺は年齢のことなんて一言も言ってませんが。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

長い沈黙が落ちた。心なし顔も赤い。少しやりすぎたか？

「くそっ！比企ヶ谷のせいで婚活がパーだ！ええいこうなったらヤケだ！・・・私の実年齢は三十代前後、しがない国語科教員としてそこの問題児たちを教えている。趣味は酒とタバコ、あと少年漫画。好物はラーメン。千葉県内のラーメンには一家言ある。よろしく頼む。」

あぁ・・・。と何故か安心したため息が場を覆う。痛々しさが滲み出てて皆も見ていて辛かったらしい。

「えーと、ひとまず知り合いってことで入っても大丈夫か？」

「あぁ・・・。でもキリトもなんで連れてきたんだよ・・・？」

「いや、俺じゃなくてシノンが・・・」

「私に振らないで。信頼出来そうで実力もあるから呼んだのよ。まあ、少し嘘があったけど誤差範囲よ。」

無表情になんとか無かったことにしようとしているが、冷や汗が頬を垂れている。

結局、年齢偽称は水に流してメンバー入りすることになった平塚先生を迎えてもう一人を待つ。

入って来たのは俺と同い年くらいの少女だった。

「あれ？貴方って学校で見たことあるよね？もしかして二人目って・・・？」

「はい。皆さんと同じ、ＳＡＯプレイヤーです。」

どうやらこの場の多くと知り合いなようで安心する。ひとまずは無用なトラブルは避けれそうだ。

「・・・・・・・・・・・・・・そして、元ラフコフのメンバーです。」

その言葉に場の空気が凍りつく。一体なにがあった？ラフコフは禁句なのか？そもそもラフコフってなんだ？

「ラフコフは、ＳＡＯをデスゲームと知った上でＰＫをしていた殺人ギルドです。そして私はそのギルマスであるｐｈｏの知り合いです。」

「――――――っ!?」

たまらずといった様子でキリトが立ち上がる。それをアスナが抑えつつも本人も動揺を隠せないでいる。おおむねそれは皆も同様で、俺たちと同じく困惑しているのはリーファとシノンぐらいだった。

皆が何を言っていいのか分からずに押し黙る中、雪ノ下がおもむろに口を開いた。

「私はＳＡＯの経験者でないからよくわからないのだけど、本で得た知識と今の話を合わせると、あなたは稀代の殺人鬼と親交があって事件の実情を最も知っている最重要人物となるのじゃないかしら？それなのに今まだ名前が一切表に出ず、あまつさえキリト君のようなトッププレイヤーでも知らない。そんなことがあり得るのかしら？　少な

くとも私は今の話であなたを信用することはできないわ。それはおそらくここにいる皆も同じ気持ちよ。」

　しかし、そんなことはわかっているといった様子の彼女の次の一言に場は沈黙に包まれる。

「ええ。それはわかっています。普通はこんなことを言っても信用されませんし、信じてもらえたとしても信用を失うだけです。でも、私は皆さんを助けるために一人でも動きます。」

「――――――――それが、私がＰｏＨさんに頼まれたことですから。」

第15話：カフェ　ラフコフ奇譚；くまのＰｏＨさん

「なあ、キリト。結局、お前はあいつを信用するのか？」
「…　わからない。少なくとも嘘は言ってない様子だった。」
「まあ、話が理解できる奴らからしたら相当にショッキングな話だったしなあ…」
今は会議が終わってしばらく後。皆がケーキ片手に談笑している。
そんな中、俺とキリトは神妙な顔をして向き合っていた。
「まさか、あんな話を聞かされるなんて思いもよらなかった…」
「ああ。本当にな…」
そしてキリトがひときわ大きなため息をつく。
ことの発端は数時間前の遡る…

「なんだって!?ＰｏＨが指示をしていたのか!?」
「はい。皆さんはあまり信じられないでしょうが、あの人は人を殺すことに躊躇しないのと同じくらいに人助けにも躊躇しませんから。」

そう言って少女はＰｏＨの、ＳＡＯでの話を始めた。
「私が彼と会ったのは第三階層でした。当時、ひたすらレベリングに明け暮れていた私はふとした失敗でモンスターの群れに囲まれてしまっていました。そこを助けてくれたのがＰｏＨさんです。」
「彼は、めんどくさそうにモンスターを倒し終えた後、私にこう言いました。
『自殺志願なら殺してやるけど、どうする？一回１００００００コルな。』と。
その当時の私は簡単に挑発に乗ってしまいました。それで彼と決闘をすることのなったのですが・・・」
「結果は惨敗でした。普通の襲撃戦であれば私はなすすべもなく死んでいたでしょう。それでも、私はあきらめきれずに、とんでもないことを口走ってしまいました。
『いつかおまえを倒してやる。だからしばらく弟子入りさせろ』って。
当然断られました。けれど、あきらめきれなかった私は、無理を言ってフレンド登録をしていつも彼の跡を付け回していました。彼が折れてくれたのはそれから1か月後でした。」
「彼は、本当に珍しく困り切ったような、あきれたような表情をしていました。
曰く、『お前が付け回しているせいで仕事ができない』とのことでした。それで私はここぞとばかりに自分をアピールしました。何としても弟子にしてもらうことに必死

だったんです。それで結局、彼は折れてくれました。
ただし、一つだけ条件が付いていました。
『俺はやりたいことがある。お前を弟子にしてやるから、お前もそれに協力しろ』。それが条件でした。
それから、彼は実際にその様子を私に見せました。
…　それは、とても直視に耐えるようなものではありませんでした。
「たまたま通りがかったプレイヤーを彼は殺しました。ただ何でもないように。まるで息をするかのように自然な動作で――――彼はそのプレイヤーを殺しました。
そのプレイヤーは最後まで何が起きたかわからない様子でした。そして現状を理解して叫びだそうとした瞬間に、消滅しました。」
「彼は思わず吐きそうになった私を見てにやりと笑いました。『どうだ、これでもついてこれるか?』と。」
「私の答えは『はい』でした。それを聞いた彼は笑い声をあげて笑い出しました。決死の覚悟を笑われたようで思わず抜刀しかけたとこ悪露で、からは笑いをこらえながら言いました。
『もともとお前にに人殺しなんてできると思ってない。お前にしてほしいのは裏方の仕事だ。いわば雑用だな』

それから、彼は私に一つの構想を話しました。それが、《笑う棺桶》の原案ともいえる構想でした。そして彼は、私にその事務仕事と調整を押し付けてきました。

「正直言って、そんなマネージャーのようなことは向いていないと思ったのですが、ここまで来て放り出してくれるなんて思えませんでしたから、私は了承しました。これが、私と彼のなれそめです。」

一気に話されて、情報が追い付かなくなった俺たちはしばらく黙っていた。

俺はまるで異国後で怪物の話を聞いたかのような気分だった。

何を言っているのかはわからないが、とにかく恐怖だけはわかる。そんな感じだ。

しかし、少女の話はまだまだ続く。

「それからしばらくの話は割愛します。あまりに長すぎますから。

飛んで半年後の話です。そのころはすでにラフコフも出来上がっていて、だいぶん仕事も落ち着いてきていました。もっとも、書類仕事はものすごい量でしたが。

ところがある日、一つ事件が起こりました。」

「ＰｏＨさんが帰ってこなかったんです。それが一日二日ならよかったです。ふらっといなくなることはよくありましたから。それでも、一週間はさすがに長すぎました。彼

はどうやら多くの階層を行ったり来たりしながら、何かを探していた様子でした。
まさか彼が死ぬわけないと思ってはいましたが、不安になった私がいよいよ探しに出かけようかとしていた時、彼は突然帰ってきました。
「今まで何をしていたのかと問い詰めた私に、彼は自慢げにアイテムを見せびらかしてきました。
そこには多くの食材アイテムがびっしりと埋まっていました。何事かと聞いた私に、彼はこう言いました。
『ちょっとお菓子作りをしてみようと思う』って。
「「「いやいや、ちょっと待て！」」」
さすがに突っ込まなきゃまずいところが出てきた。お菓子作り!?どうしてそうなった。
「さすがのそれは嘘だろう… なあ？」
「う、うん。さすがにそれはちょっと…」
信じきれない様子のキリトとアスナに少女はある店の名前を告げる。
「《ギフトボックス》ってお店を知っていますか？」
「ああ。あのめちゃくちゃケーキがうまい店だろ？あそこのはもう一回食べたいよな

あ。」
「うんうん。あそこのスイーツは鉾とは比べ物にならないぐらいおいしかったよね。私も自分で作ろうとしたけどうまくいかなかったんだよね。」
「そうですか、それならよかったです。それを聞いたらきっと彼も喜びますよ。」
・・・　ああ。なるほどそういうことか。
「えっ!?もしかして、あのお店って、ＰｏＨが作ったお店!?」
「ええ。ちなみに私や他のラフコフメンバー、それに一般の人たちも一緒になって切り盛りしていましたよ?」
「まじかよお・・・」
　キリトがやばいぐらいに憔悴している。軽く鬱っぽい。アスナやシリカ、クラインたちも同じように憔悴・・・　何人かお茶吹いてる奴いるな・・・。そこまでツボるのか。
「さて、話を戻します。彼はお菓子作りをするといってから、俄然料理スキルにこだわり始めました。ええ、それはもう彼の本来の目的が数か月は滞る程度に。彼が何を創ろうとしていたのかは、一か月後に分かりました。
　ある日、満面の笑みで私の部屋に彼が入ってきました。なんでも作りたかったものがついに作れたそうです。
　その完成品を見せてもらって私は絶句しました。」

「机の上には多種多様のケーキがホール単位で並んでいたんです。その中でも一番目を引いたのはアイスケーキでした。まさかＳＡＯでアイスなんてものがあるとは知りませんでしたし、よもやアイスケーキなんてありえませんでした。けれど、彼はそれを創っていました。」
「そして、彼はそれを私の前に差し出しました。突然のことに私が戸惑っていると、彼はいたずらを成功させたかのような笑いを浮かべました。『今日はお前の誕生日だろう？』私は彼の言葉にいささか動揺しすぎてしまって、何が何だかわからないでひとまずラフコフのメンツを全員呼んでケーキの処理にあたりました。その中で出た冗談がきっかけでカフェを開くきっかけになりました。」
「そのあとは、夏になったら浜辺でアイスの移動販売をしたり…　そうそう、キリトさんのリクエストしたドクターペッパー味のアイス、なぜか意外と評判で彼も喜んでいましたよ？あの味の再現にはほとほと苦労したそうですが。」

　と、そこまで明るかった少女の表情が曇る。
「しかし、楽しいのはそこまでででした。」
「ある日、ラフコフと討伐隊との戦闘が勃発しました。その日、私は彼にお使いを頼まれていて下の階層に出かけていました。帰ってきたときにはすべてが終わっていました。

見知った仲間はほとんどが死んだか捕まったかで連絡がつかない状態でした。」
「今だから言いますが、私はあの時に討伐隊の人たちを恨みました。それはもう、不意打ちで何人かＰＫをしようとしたぐらいには。　けれど、キリトさんや前線組たちを相手に勝てる確率なんて１パーセントもなかったです。私は、いつか皆さんに復讐をしようと機会を窺っていました。」
「それなのに、彼は、私に止めるようにいってきました。おまけに、今後一切キリトさんには関わるなとも言っていました。それに反発した私はその場でフレンドを解除して一方的に去っていきました。その後は連絡を取ってなかったので彼のその後は知りません。なぜ彼が私のリアルの連絡先を知っていたのかは知りませんが、最後に喧嘩別れしたことの、せめてもの罪滅ぼしとして引き受けることにしました。」
「なので、私があなたたちを恨んでいるように、あなたたちが私を恨んでも構いません。同じ様に同じ、私があなた達を信用しないように私を信用しなくても構いません。私は私で勝手に動くだけです。」
「私が話せることは大体すべてお話しました。あとの判断は皆さんにお任せします。」
「では、私はこれで失礼します。」
　そういって彼女は俺たちに一礼して去っていった。皆に大きすぎる影響を残して。

キリトは再び頭を抱えてテーブルに倒れ伏す。
「はあーーーっ。全く、訳が分からん。なんでＰｏＨがこのことを知っているのかがわからない以上迂闊に信用はできないし…」
「いや、それなら初めから信用しなけりゃいいんじゃないか？彼女もそういってただろ。」
「どういうことだ？」
「材…　義輝と同じことをするんだよ。陽動のための偽情報を流して動かせる。あいつは俺たちを信用してないならこっちもそれに乗っかればいい。」
嘘吐きの言うことは皆信用しない。それはそいつの言うことが嘘だと信用しているからだ。
なら、そこを利用すればいい。幸いこっちには雪ノ下雪乃プラスその姉雪ノ下陽乃がいる。この二人がいれば大抵の人間は騙せる。むしろゲームマスターまで丸め込めるまである。」
「けど、そこまでしてこれ以上関係を悪化させたら本気で襲われかねないと思うんだが。」
「ああ。その点に関しては考えがある。」
「考え？」

俺はひとり笑みを浮かべる。『これはゲームであっても遊びではない』これは確かＳＡＯの作者の言葉だったか。

確かに、今回の事件はゲーム内での事件だ。しかし、それはいづれ現実にも影響を及ぼす。だからこうして集まっている。そして皆が動けないのはこのゲームを好きだからだ。だからここで下手に問題を起こしたくない。

それなら、ここに一人適任がいるじゃないか。ぼっちで初心者かつフレンドが少なく認知度が低い。このゲームに対してそこまでやりこんでいない。そんなプレイヤーが、ここにいる。

「ああ。キリト達には迷惑はかけない。だから安心しろ。」

訝しむキリトを丸め込めると、俺は早速計画を立てる。

その中で俺はなんとなく、ＰｏＨってやつとは仲良くなれそうだと思った。

だって、あいつと俺って趣味が似てるしな。

こうして、会議は終了した。明日からの予定を立てながら、俺は珍しく笑っていた。

ああ、明日が楽しみだ。

第１６．５話：ガールズトークｓｉｄｅシリカ

キリトと八幡が話をしていた頃、別なテーブルにて

「いやー。それにしてもあれには驚いたわね。ま、まさか、あのＰｏＨの趣味が、お、お菓子作りだなんて…　ぷくくく。」
「もう！リズさんさっきから笑いすぎですよ！確かに面白いのはわかりますけど…」
「そうは言ってもさー。シリカだってジンジャエール吹いてたじゃん。あれはないと思うよ？」
「ううっ…　なんであの時の私は飲み物を飲んで…」
「あーあ。こりゃあキリトからはどん引かれたんじゃない？花の女子があれはさすがに…」
　ケラケラ笑うリズベットにほほを膨らませたシリカはささやかな復讐を試みる。
「あー。そういえば、ＳＡＯでは確か龍の巣に行ってインゴットをとってきたんでしたよね？でも、あの時のインゴットって…」
「うわーー！それ以上は言うなーー！あれはノーカン！ノーカンだから！あくまでデータ！

数字の羅列！」
「ふふっ。そういうことにしておいてあげましょう。」
　しかし、ここでリズベットは得意満面のシリカに爆弾を投下する。
「だけど、最近シリカってキリトと話す回数減ったよね？もしかして距離置かれてる？」
「ひ、ひいっ!?そ、そんなことないですよ！ただ・・・」
「ただ・・・？」
「なんか・・・　直葉ちゃんと、キャラかぶりがするっていうか・・・　むしろあっちは胸もあるし・・・」
「ああー。完全に下位互換にされちゃったと。」
「断言しなくてもいいじゃないですかー！ひどいです！」
　すると、ぷんすか怒るシリカを見ていたリズベットはふと名案をひらめいた。
「あっ。じゃあさ、たまには別な人にも目を向けてみたらどう？」
「そうやってライバル減らそうとする・・・」
「い、いやあ、そういうわけじゃなくてさ、ほら、八幡ってすごく暗いじゃん？それを治すのにちょうどいいかなあって・・・」
「まあ、確かにちょっと影がありますね。目が腐ってるし。」
「うん。ついでに性格も腐ってるらしいよ。ゆいゆい達曰く。」

「余計駄目じゃないですか…」
「まあまあ。ひとまず話してみたらイメージ変わるかもよ?」
そう言ってシリカの背中をぐいぐい押していく。シリカは嫌がるそぶりを見せてはいるが、一応八幡には挨拶はしておきたかったので顔会わせのつもりで向かってみる。
「ねえ、八幡。ちょっといい?」
「なんだ?今ちょっと忙しいんだが。」
「うん。すぐ終わるから。ちょっとこの子を紹介しておきたくってね。」
「シリカです。これからよろしくお願いします。」
「ああ。雪ノ下に狙われてた。悪いな。雪ノ下は猫を見ると突っ込む癖があるから…」
「い、いえ。気にしてないですから大丈夫です。」
意外と礼儀正しいようで一安心
「それにしても、キリトハーレムも随分とそろってるんだな。そりゃクラインもうらやましがるはずだ。」
していたら突然手榴弾を投げられた。
「キ、キリトハーレムって何ですか!」
「クラインが言ってたぞ?アスナが正妻で浮気防止にキリトの体にＧＰＳ付けてるって。それに懲りずに妹や幼馴染系やクーデレに手を出して折檻されてるって。」

「誤解だよ！」
　あらぬ中傷にキリトが慌てて立ち上がると、その背後にアスナが能面のような笑みで立っていた。キリトの腕をがしっと掴むとそのまま外へ引っ張っていった。
「ちょ!?明日奈？やめ、誤解だって！まだだれにも手を出してないって！」
「まだ？ってことはいずれはそうするつもりだったの？」
「ちがっ！それは言葉の綾で・・・」
「ちょっとゆっくり話を聞かせてもらおうかな？久しぶりに、二人きりで、仲良く、内緒の話をね♬」
「だーれーかー！助けてくれー！くそっ！クラインのやつ覚えてろよ！」
「クラインなら寝てるよ。」
　果たしてその言葉が届いたのかはわからないが、キリトは悲鳴を上げて連行されていった。
「あー。その、なんだ。あれは不幸な事故。キリトの自己責任。俺たちは何も悪くない。オーケー？」
　八幡の言葉に皆神妙な顔でうなずくのだった。
　何も知らず眠りこけているクラインを除いて・・・

「それで、シリカは陽動を頼みたいんだけどいいか？」
「陽動ですか…？」
「ああ。グレーゾーンの面子を引っ張ってくる。多分シリカならいけると思うんだが…」
「でも、それって狙われたりしますよね…」
「ああ。そうだな。それなりに危険を伴う。」
その言葉に、シリカはＳＡＯ時代の一件を思い出す。周りにちやほやされて舞い上がって、結果としてピナを失いかけた。二度は同じことを繰り返さない。けれど、ストーカーという存在はやはり恐怖の対象だ。どうしても足がすくんでしまう。
そんなシリカを見かねてか、八幡は作戦の変更を提案する。
「いや、無理ならべつにいいんだ。最悪こっちで何とかする。」
「でも…」
これ以上、足手まといになったら、本当にキリトに見放されるかもしれない。
そんな思いから、彼女はある提案をする。
「じゃあ、八幡さんが私を守ってください。」
「ん？」
「私のボディーガードになってください。それなら、大丈夫です。」

「いや、いっても俺弱いぞ？」
「大丈夫ですよ。初心者なのにＰＫを撃退して、おまけにレアアイテムまで持ってるなら十分です。それに、最低限は自分で守れるので、そこにいるだけでいいですよ。」
「まあ、それぐらいなら、いい、のか？」
「じゃあ、よろしくお願いしますね。八幡さん！」
「お、おう。よろしく…」
たまには活躍してキリトさんにいい所見せてやるんだ！そう思いながら、シリカは少しだけ八幡を見てみる。
（ちょっとだけキリトさんに似てる、かも？）
そんなことを一瞬考えてみるシリカだった。

～ちなみにそのころキリトは～

「で？具体的に誰に何をしたか教えてもらいましょうか？」
『パパ、浮気は駄目ですよ！』

「いや、別に誰とも何ともない・・・」
「ダウト。心拍数と体温上がってる。」
「いや、そのアプリ使うのやめてもらえませんかね!?」
「まず、直葉ちゃんとは何かあったの？」
「なにもな『心拍数と体温、急上昇しました！』ちょっと!?まだ何も言ってな――――」
「キリト君？」
「はい、すみませんでした。」

このあと、３時間ほど説教されました。

第１７話：只々雑談をする回

「あっ！８００００さん！こっちですこっちー！」
「しっ、声がでかい！気づかれたらどうすんだ！」
「す、すみません…」
途端にショボーンと尻尾を垂らすシリカと怒鳴った俺は完全に俺が悪者みたいだった。
今日は作戦会議（という名のオフ会）の翌日。早速俺とシリカは作戦を実行しに来た。
ちなみに、俺はこの後キリトと合流してギルドに直接乗り込む役割も担っている。ゲームの中でも忙しい。なんのためのゲームだ。いや、それを考えたらきりがない。今は目の前のことに集中しよう。
「そういえば、８００００さんはまだＡＬＯに来て日が浅いんでしたよね。町の紹介でもしますか？」
「うーん。正直そういうのはひとりでやりたい主義なんだが。」
「ボッチの思考です。完全に根暗ですね。」
「うっさい。ボッチで何が悪い。俺はむしろ用もないのに集まって無駄な時間を過ご

すほうが無益だと思うが。」

「それがボッチの思考なんですよ…」

「そうは言ってもな？一緒に集まって中身のない会話をしてその中で他人を貶めてうわーヒキタニ君きもーい近寄らないとこー。とか言い始めて悲しむやつがいるんだよ。」

「まるで見てきたかのように話しますね…」

そりゃそうだ。だってソースはもちろん俺だから。

「まー、ボッチで過ごす人もうちの学校にもかなりいますけどね？そういう人たちは大抵ハイゲーマーですけど、８００００さんはどうですか？」

「俺は… そうだな。高校に入ると同時にすっぱりやめた。それ以降は基本的に本を読んでばっかだったな。有名タイトルの新作が出たら一通りプレイしてアマゾンで叩いたりするぐらいだな。」

「うわあ… この人最低です… なまじプレイしてる当たり余計に質が悪いというか…」

「ちなみにこのゲームは今のところ星４つといったところだな。」

「あれ？意外と高いですね？どこか気に入ったんですか？」

「やっぱり飛行システムはいいよな。マリカの要領で飛べるのはマリカガチ勢の俺と

しては８００００的にポイント高い。」
「マリカって…　あとその八幡的にポイント高いって何ですか。気持ち悪いです。」
ドン引きされた。小町がやったらかわいいのになぜだ。同じ遺伝子が流れてるとは思えない。
というか、こいつ何気に口悪いな。キリトがいないと本性を現すタイプか。
「お前って、なんか俺の妹に似てるんだよな。口が悪いところとか、妙に内弁慶なところとか。」
「……」
軽口のつもりで言っててみると思いの外引かれた。まあ、妹みたいといわれりゃ誰でもそうか…
「あの、８００００さん。」
「ん？あー。さっきのことは忘れてくれ。俺も少し口が滑った。」
「いえ。そうではなくて…」
なんか結構思い悩んでる様子だった。もしかしてこれ地雷踏んだ？
なんて焦っていると、シリカは意を決して訊ねてきた。
「私って、妹っぽいですか？」
「お、おう？うん。ま、そうだな。背がちっさいし、だれにも敬語だし。そのくせ内弁

慶だからな。」

「それほとんど貶してますよね…。はあ。でも、やっぱりそう見えますか…」

「まあ、強いて言うなら知り合いの後輩と妹を足して二で割った感じだな。小悪魔な部分と口の悪さとか、慇懃無礼と内弁慶とか。そんな部分が後輩の妹系っぽくさせてるんじゃないのか?」

「よくわからないですケド、私の見た目と性格が問題なのはわかりました…」

しかし、ここまで真剣に思い悩むような理由って、まあ。一つしかないよな…

「どうした?キリトは年上の巨乳好きなの気にしてるのか?あんなもん、彼女が変われば好みも変わるから気にするな。どうせ一時の気の迷いだぞ。」

「彼女いない８００００さんに言われてもなあ…」

「くそ! 反論できねえ!」

「でも、まあ。もし本当にそうなら…」

シリカはしばらく考えるようにポーズをとって固まった。こんなポーズ一つとっても年下の後輩キャラか妹キャラとして様になってるんだからなあ…

「ま、まあ、あまり深く考えすぎるなよ?どうせさっきのも推測でしかないんだし。ほら、よく言うだろ?『好きになった人がタイプ』って。」

「それはそうですけど… ８００００さんの口からきくと説得力皆無ですね。」

「恋愛経験皆無が語ってすみませんでしたね！」
なんだよこいつ…　小町と一色だけじゃなくて雪ノ下も足した感じか？どんなキメラだよ…
小悪魔な毒舌系妹キャラ。うわ。想像しただけでＳＡＮ値削られる。一週間も一緒にいたら死にたくなる。
こいつと一緒にいるキリトのメンタルっていったい何なんだ…。いや。あいつはキリトの前じゃ猫被ってんだったか。ならキリトを盾にすれば…
「そうそう。あとでキリトも合流するからそのつもりでな。」
「えっ!?そんなの聞いてないですよ！」
「当然だ。言ってないんだから。」
「そんなー！そうとしてってたら準備してたのに！」
その後も文句を言い続けるシリカを軽く流していると、予定時間になった。
「それじゃ、行くぞ。」
「…　はい！」

というわけで、まず最初にすることは…
「８００００さん、エスコートよろしく願いしますね？」

「お、おう。」

シリカと街中をデート。

はあ?どうしてこうなった?そんなのこっちが知りたいわ。

第１８章：これは、デートであっても遊びではない

さて、状況を整理しよう。

いま、俺は作戦の一環でシリカと街でデート（？）をしている。

この一言だけですでにおかしい。もともとは俺が離れて監視する予定だったのに。

リズベットが口を出してきてから変な方向に転がった…　いや。その前に雪ノ下か。

あいつが帰り道で突然作戦変更を切り出してきて…

それを由比ケ浜がリズベットに伝えて、シリカと俺に作戦変更の通達が来た。

結局元凶は雪ノ下か！

くそ、こうなったら陽乃さんに連絡をつけて…　いや。それは危険か。なら…

「８００００さん？ちょっとあそこのカフェに入りませんか？」

「えっ？ああ。わかった。」

「どうしたんですか？考え事ですか？まあ、いろいろ気にしてくれてるのは構いませ

んけど。」

そういって上目遣いにこちらをのぞき込んでくる。

「できれば、私のほうに集中していてくださいね？」

近い近い顔が近い！あと誤解を招くような発言をするな！

「なんですか誤解を招くような発言って。言っておきますけど、私は・・・」

「あーはいはい。キリトが好きなんだろ？キリトハーレム最古参の一人だけど一向に距離が縮まないからこうしていろいろ俺で実験をしている。だろ？」

「ちょっ!?なんでそんなことまで知ってるんですか！そんなこと一言も言ってないのに。」

「お前は顔に出やすいんだよ。」

嘘だ。実際は一色との一件から推測してみただけだが。

「うう～。そういう８００００さんだって、さっきから顔がにやけてますよ。」

「は、はあ？そんなことあるわけ・・・」

「ＶＲ内では感情表現が大味になるんですよ。だからさっきから一々反応が分かりやす過ぎます。」

しまった。完全に自爆した。これからはいつも以上に表情を引き締めないと・・・

「必死ににやけを抑えなくてもいいですから。それも出てますよ？」

「変なところで高性能だな!?このシステム創った奴の性格の悪さがにじみ出てやがる。」
「まあ、ＳＡＯを創るような人ですしね。」
ＳＡＯ事件を思い出したのかシリカの表情が少し曇る。
「…　シリカは、ＳＡＯについてどう思っているんだ?」
「どう…。そうですね。最初はとても怖かったです。いつ帰れるのか分からなくって、一人ぼっちで。ピナが仲間になってからはだいぶん落ち着きましたけど、それでもやっぱり怖かったです。」
「そして、キリトと会ったのか。」
「はい。キリトさんは私がピナを亡くした時に、生き返らせるのを手伝ってくれたんです。だから、私はキリトさんにとても感謝してます。それと一緒に、ほかの人より一緒にいて安心するんです。」
キリトのことをシリカはとてもうれしそうな表情で。その気持ちは今も変わらないんだろう。…　所詮非リアの推測だが。
しかし、シリカの笑顔が少し陰る。
「…　だけど、キリトさんの周りには一杯素敵な人がいました。その中に私は釣り合ってるのかなって、時々考えるんです。そのたびに胸のあたりがいたくなって、キリ

トさんと話ができなくなって…」

「……」

「だから、今回はちゃんと自分の役目をこなしてキリトさんに褒めてもらえるようになりたいんです。そのためにも、絶対に、逃げちゃ、駄目なんです…」

シリカはうつむいて小さく震える。その様子は、キリトから見放されることにおびえているようでもあり、これからの恐怖に必死に立ち向かおうとしているようでもあった。

こんな様子を見せられて、まだ作戦を実行できるほど俺は鬼じゃない。雪ノ下の案も悪くはないが少し人選ミスだ。シリカにこんな役目はあっていない。

「シリカ、作戦変更だ。」

「駄目です!そんなことしたら、私はキリトさんに…」

「安心しろ。使えないからと言って見捨てるような奴じゃない。むしろ追い詰めてるんはお前自身だろ?」

「それは… でもっ!私は――――――――――――」

「なら、一つだけいい方法がある。」

そういって、俺はもともとの予定していた計画を話す。

「え、えーっと…　８００００さん？こんな感じでいいんですかね？」
「あ、ああ。こっちも問題ないか？」
「うーん？いつもよりちょっと元気すぎる気がしますけど…　大丈夫だと思います。」
「そ、そうか…　だけど意外と難しいな、これ。は…　シリカが意外と手馴れていてびっくりなんだが。」
「うーん。私は身の回りにたくさんのお手本がいましたからね。その人たちをまねてるだけです。これでもこういったことは得意なんですよ？８００００さんとは違って」
「いや…　こっちは参考にできる絶対数が限られてくるんだよ…　参考にしたら明らかに失敗するような面子しかいなくてだな…」
「でも、そっちはひとりお手本にできそうな人がいるんじゃないですか？…　まあ、やったら悶死すること必至ですかね。」
「…　ああ。だけど、やっぱりちょっと違和感があるな。これ。」
「それは言わないお約束ですよ…。それに、今回のことはほかのみんなには絶対秘密です。」
「ああ。それぐらいわかってるよ…　だってさすがに言えるわけないだろ…。こんな――――――」

「「女装（男装）して互いに入れ替わってるなんてっ…　絶対に言えるわけないだろ（じゃないですか）!?」」

第１９話：これは、デートであっても遊びではない。続

「八幡さん…　このスカートすーすーするんですけど…」
「それがスカートのつらいところだよ…　っていうかもう口調戻しません？」
シリカが若干疲れてきたようなので口調を元に戻す。まあ、あれだけ演技ができたらそうそうばれはしないだろう。
「で、作戦なんだが…。単純に立場を入れ替えるよりは俺がシリカのふりをして倒したほうがいいと思うんだ。一応一撃ぐらいは入れてもらいたいところだけど、無理はしなくていい。どうせ俺の体なんだし何しても問題はない。」
「それだと、あとで８００００さんが何か言われませんか？一応護衛として来てるんですし何かしておいたほうが…」
「まあ、それが気になるなら別に構わないが、基本的に俺のことは気にしなくていい。どうせあいつらからの評判が悪くなっても俺は気にしないからな。」
「でも、雪乃んさんたちからは…　？」
「あいつらは元から俺の性格を承知だから特に問題はない。…　まあ、雪ノ下から小言ぐらいは言われるかもしれないが、それはいつものことだしな。」

それでもシリカは納得が言ってない様子だったので少し悪役ぶってみる。
「それに、俺はこの一件が終わったらこのゲームをやめる。どこか適当なゲームにコンバートしてそっちで波風立てずプレイする予定だからな。」
「… だからって、周囲からの印象が悪くなるのはあまりいいことでないと思うんですけど。」
「慣れたら大して気にするものでもないな。それより雪ノ下達にリアルに被害が出るほうが怖い。」
「なんだかんだ言ってゆきのんさん達のことは大事なんですね…」
「そりゃ、リアルの知り合いがストーカーにあったって聞いたら寝覚めはよくないからな。俺だってそこまで鬼じゃない。」
シリカは何やら反論しようとしていたが、口を開きかけてやめた。
「はあ… 結局８００００さんもキリトさんと似たもの同士ですか… リズさんの言ってたのってそういう…」
何やら呆れた様子でため息をつく。こっちには何のことかよくわからないんだが…。まあ、今度キリトにでも聞いてみるか。
「さて、準備は出来たな?この魔法の効果が消えないうちに片づけるぞ。」
「はい。じゃあ、しばらくはまた外でお散歩ですか。」

「あ、嗚呼。そうだな。あと、口調も直しとけよ？」
「８００００さんも、ですよ？くれぐれも私の評判を落とすようなことはしないでくださいね。・・・　まあ、大丈夫でしょうけど。」
何を基準にそう思ったのかはわからないが、とりあえず俺はこう返しておく。
「ああ。そっちは何してもいいぞ。これ以上なく評判は落ちているからな。まあ、上がることはないだろうが。」

外に出てしばらく歩くと、何やら視線を感じるようになった。特にスカートや胸の部分。
この視線を毎日女子は受けているのかと思うとぞっとする。まあ、こんな視線を受けたら雪ノ下や川何とか崎が捻くれてもおかしくない・・・。これからは気を付けよう。
「そういえば、そっちは妹がいるんだっけ？」
突然、俺のふりをしたシリカに聞かれて我に返った。
「うん。一人いますよ。ものすごくしっかりしたあほの子です。」
とっさにシリカのふりをして返したが・・・　これだとどっちが喋ってるのか分かりにくくてすごくやりづらい。
「その妹と俺ってやっぱり似てるのか・・・？ああ、俺ってのはシリカのことだが・・・」

「わかりにくいんでもう自分の名前で呼びましょう。こっちもなんだか混乱してきました。」
「了解。妹キャラってどんな感じなんだ？」
「年下だけど若干生意気でしっかりしてる感じですかね。ほら、リーファさんとかそんな感じじゃないですか。キリトさんに世話を焼いたりちょっと注意してみたり。」
「なるほど・・・。じゃあ、後輩キャラってのは・・・？」
「これは私の後輩なんですけど・・・。年上を扱うのがうまいっていう感じですかね。気が付いたらペースに飲まれてて仕事を押し付けられてるけど、なぜか怒れない。みたいなキャラです。」
これは誰とは言わないが某いろはす。なぜか奉仕部に居座ってる生徒会長。まあ、最近はあいつもそれなりに仕事をするようにはなってきたけどな。
「うーん。といっても自分じゃあそんなタイプじゃないと思うんだが・・・」
「何言ってるんですか。十分、小悪魔系後輩キャラですよ。自覚なかったんですか？」
「ものすごく失礼ない意味で言ってるように思うんだが・・・」
「うわー！今の目つき私にそっくりです！だいぶんひねたキャラが板についてきましたね！その調子です！」
「それ以上馬鹿にしたらぶん殴るぞ？」

「…　私はそんなキャラじゃないんですけど。」
「いやいや。見事に再現してると思うぞ？特に切れやすそうな根暗っぽさとか。」
互いに沈黙する。どうやらこの作戦をとったのは間違いだったようだ。こんな奴に俺の体を預けられるか！
「なあ、やっぱりこの作戦はやめに＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿」
「８、シリカ！うしろ！」
えっ？
何が起きたかわからないまま俺は吹き飛ばされた。
周りを見回してみれば目的地についていたようだった。そこは街のはずれ。ＰＫが許されている地帯。
そこまでプレイヤーをおびき寄せて叩く予定だったが…　完全に油断していた。
「ははっ。いやー。あの人もなかなかいい物件を紹介してくれますねー。あの男を痛めつけるってのが条件だったのはアレだけど、まあ、良しとしますか。」
リーダーっぽい男がべらべら喋ってくれたおかげで状況は飲み込めた。犯人ってこんなのばっかか
「くっ…　８００００さんは逃げてください！こっちは何とかします！」
「ほおう？嬢ちゃん、意外と勇気あるねえ。それなりに腕に自信はあるのかな？だと

しても五対一は分が悪いっしょ？いけるの？」
「あなたちが何をしたいのかはわかってますから、さっさとしたければどうぞ。・・・　最も、最大限抵抗しますが。」
「へーえ。だけど、俺たちがやりたいことって何だと思ってるの？口に出していってごらんよ？」
「っ・・・」
言えるか！普通ならまだしもシリカの体で言えるか！
「言えないようなことを想像してるところ悪いけど、俺らがやりたいのってちょっと違うんだわ。」
「えっ・・・　？」
男はにやにや笑いをしながらナイフを取り出す。
「俺らはな・・・　？ＰＫをするのが目的なんだよ。で、どうせならかわいい子のほうがモチベも上がるからこうして狙ってみただけ。だから結局あの男も殺しに行くんだけどな？」
「・・・・・・・・」
「おおっとぉ？怖くて黙っちゃいましたか？まあ、殺せるんなら・・・　いいんだけどさあ！」

男はナイフを振り上げる。その先端は俺の心臓を真っすぐ突き刺そうと――――

「悪いけど、俺はパスで。」

したところで吹き飛ばされた。

何が起きてるかわからないといった様子で転がっている男を見下ろす。さっきとは立場が逆だ。

「生憎と、こっちはＰＫされるのは嫌いなもんでね？」

変装を解いて小刀を構える。キリトの二刀流の見様見真似だ。まあ、虚仮脅しでもないよりはましだ。

「とっとと消えてくれないか？」

小刀から熱風が噴き出す。とっさに飛びのいた男のがら空きになった胸元に飛び込む。

「!?　かはっ！」

風で足元をブーストして加速そのままの勢いで胸に突き刺し、続けて首をはねる。

背後で固まっていた仲間たちが蘇生をしようとしたところで、無駄だ。

「散れ。」
風を起こして、残ったリメインライトを消し去る。
「はあ!?なんだよそれ!」
困惑している魔導士たちに答えるわけもなく、炎と風で刃を創ってその腕を切断する。
ついでに幻惑魔法で暗闇状態にして足止め。
その隙をついて突撃してきた剣士のサラマンダーの渾身の一撃は宙を描く。
「馬鹿が。こっちだ。」
「!?」
「暗闇と言っても、視界を黒くするだけじゃない。幻影なんかもある。」
おそらく、今、サラマンダーの周りには大量の俺が群がっていることだろう。その証拠にありもしないところを切り付けている。
「よっと。これであとは魔導士だけか。」
魔導士たちのほうを見るとだんだん暗闇が解けてきたようでこちらを探し始めている。さて、じゃあ今のうちに一つ面白いのをやってみるか・・・
魔導士の一人が俺を見つけた。しかし、その反応は明確な怯えだった。
「はあ!?な、なんでこんなところに邪心級のモンスターがいんだよ!?」

どうやらうまくいったようだ。
キリトがかつて使ったという、自分をモンスターに見せかける魔法。
ランダムで外れのほうが多いわけだが・・・　賭けは成功した。
「ぐううぅおおおあああっ!!!!!!!!」
「ひいいいいいいっ!!!!!!!!」
「退却、退却！」
「逃げるんだよ！」
逃がすわけがない。一気に彼らを捕まえる。今の俺は腕が八本ある状態らしく違和感があるが、この状況では便利なので使ってみた。
「　ハ　ケ　」
「ひいいいいいいっ！」
「　ダレ　ガ　シュボウシャ　ダ　」
「ア、『ゾシーク』のダーレスです！」
クトゥルフ神話関連か・・・　安直だな。
「　オマエ　ハ　ノコレ　。　ソレ　イガイ　ハ　カエレ　。」
「　ソシテ　ツタエロ　。『　オマエ　ハ　シンバツ　ヲ　ウケル　ト　。　』」
「はいいいいいっ！つ、伝えます！」

掴んでいた手を放してやると、ものすごい速度で逃げて行った。
「さて、お前の処分だが…」
「ひいいい！た、助け…。」
「黒の剣士たちに任せようと思う。何か嘘を言ったら即座につぶされるからそのつもりで。」
その魔導士の絶叫はフィールドに響き渡った。

第２０話：斯くして序章は終わり、蝙蝠は舞う

「で、８００００はずっと逃げ回ってたのか？」
「ああ。面目ない…」
キリトの手前、少しだけ申し訳なさそうにしているが俺より隣にいるシリカが圧倒的に申し訳なさそうにしている。
「いや、さすがにゲームを始めてすぐに対人戦はやっぱり無理があったんだ。これはしょうがない。」
「そういってくれると助かる。思ったよりシリカが強くて助かった。なあ、シリカ？」
「ふえ？ひゃ、ひゃい！」
俺が話を振ってもこの始末。心ここにあらずといったところか。せっかくのチャンスなのにもったいない。
そろそろ強硬策に出るかと思案していたところで、キリトのほうから一つ提案があった。
「この後のギルドとの交渉なんだけど、悪いがシリカと変わってもいいか？」
「どうしたんだ？何か問題でもできたか？」

突然の申し出に俺は少し戸惑う。ここでキリトがいなくなると戦力不足に陥ってしまう。正直言って俺は不意打ち闇討ち陽動かく乱しかできないので真正面から切り込める人材が必須だ。

「いや、本当に悪い！ちょっと領主組との話し合いに俺が行かなくちゃならなくなって…」

「領主組？」

「ああ。このＡＬＯの主軸をまとめるリーダー的な人たちのことで、そこのスプリガン代表の代わりに出てくれって頼まれちゃってな…」

「頼まれちゃってって…。まあ、仕方ないから別にいいけど、シリカ以外に代わりはいるのか？」

できればアスナあたりが欲しいところ…　最悪材木座でもいい。なんだかんだ言ってあいつは強いらしいし。本妻と同行するシリカもつらいだろうし。

「いや、それがみんな予定が付かなくって…」

まじか。いや、これは無理だ。火力なしで城攻めをするなんて愚の骨頂だろ。

「最悪材…　義輝でもいいんだぞ？」

「いや、あいつはかなり忙しいっていうか、今回手伝ってくれてるほうが不思議っていうぐらいに多忙だぞ？

イン率は普通のプレイヤー並みであれだけの道場を回しながらクエストもこなしてる時点で相当にかつかつなはずだし。」
「くっ…。肝心な時に使えないやつめ。仕方ない。軽く混乱させて撤退するか…」
「まあ、こうして捕虜は取ったんだしいいんじゃないか？あとは軽く警告するぐらいでいいわけだし。」
「シリカ、それでいいか？」
「…　はい。わかりました…」
完全にやる気を失っているな。キリトがいない以上特にやる気を出す必要もないし、何よりモチベが上がらない。しかし、ここで手を抜かれても困るので一応フォローだけはしておく。
「キリト、少し耳をかせ。」
「ん？なんだ？」
「この件が終わったらシリカをどこか遊びに連れ出してやれ。さすがにお前抜きで敵陣に突撃させるのはかわいそうだろ。」
「う…。それを言われると断りづらいな。」
「お前なら修羅場っても何とかなるだろ。まあ、誘うなら可能な限りシリカ一人だけにしとけよ。前みたいになっても俺は責任を取りかねるぞ。」

「……　わかった。」
どうやら前回は相当に恐ろしい目にあったらしい。一応承諾はしてくれたが後でこっちのフォローにも回るか。
ついでにいろいろ頼みたいこともあるし。
「じゃあ、シリカ。いったん装備を整えてから行くぞ。」
「いえ。もうこのまま行っちゃいましょう。」
突然やる気になり始めたシリカは困惑する俺をよそにとっとと準備を整える。
「はい、ポーションです。これ飲んだら出発しましょう。」
「お、おう。」
「それじゃあ、キリトさん。会議頑張ってください。」
「あ、ああ。シリカもがんばれ。」
「はい！」
花の咲くような笑みで答えるとシリカは空高く舞い上がった。それに置いて行かれないように俺も飛び立つ。
この後の惨劇には気づきもしないで・・・

「せやああっ！」

「がはあっ!?」
「とりゃあ！」
「ごふっ!?」
「いいですか、今私は怒ってるんです！こうなりたくなければ早くギルマスを出してください！」
「ひいいいいいいっ!?」
シリカは大変ご立腹だった。
お目当てだったキリトが急用でいなくなってしまったから。
ついでに８００００に手柄を譲られて内心複雑な気持ちだったから。
「最後に、私は早く帰りたいんですよーっ！」
「ごぐはあっ!?」
こうして悪鬼羅刹となり果てたシリカの前には死屍累々が積みあがる。
女子って怖い。ほんとに怖い。そしてこんな女子たちと一緒にいて生きているキリトが一番怖い。
「お、おい、そこのお前！お前の相方の手綱位ちゃんと持てよ！」
とあるプレイヤーから投げつけられた悲痛な叫びが胸を打ったが、俺はキリトから預かっているにすぎないためどうしようもない。レベルが足りないのは仕方がないな。

「さて、あらかた片づけましたけど。ギルマスはいったいどこに・・・」
「ここだぜ？」
声の方向を見ればフードを被ったサラマンダーが立っていた。そしてその腕には笑っている棺桶の入れ墨。
『『笑う棺桶』!?」
「なんだ？お前もＳＡＯサバイバーか。そっちの兄さんは？」
「ただの観客。」
「はははっ！じゃあおとなしく帰ったりはしてくれないかね？こっちはいろいろ忙しいんでね。」
「まあ、別にいいけど。」
「はははっ・・・　はあっ!?」
サラマンダーは困惑している様子だが、こっちとしても帰れるものなら早く帰りたい。
後、ブレーキを亡くした狂犬（猫）からの攻撃に耐えれるならご自由に。とも伝えておく。
「８００００さん？」
「い、いや！冗談だって冗談！まさか本当に帰るわけ・・・」

「帰ったりしたら、潰しますよ？」
どこの何を潰すんでしょうか？と聞いたら恐ろしいことになりそうだったのでやめておく。
「ん？８００００？どっかで聞いた名前だな。」
「気のせいだろ。ＳＡＯはプレイしてないし、ＡＬＯは初めて数日だぞ？」
「んんー？まあ、いいや。とりあえず、そっちの頼みはＰＫをやめることでいいのかな？」
「具体的には別ギルドのに依頼をして獲物を見繕ったりするのを止めてほしい。それさえ飲んでくれればこちらとしてもいくらかの見返りは出せる。」
「例えば？」
ここでいくつかの案があったが、シリカが付いてきている以上あまり物騒な案は出せない。
だが、俺は敢えて物騒な案を選んでみた。そっちのほうが釣れそうだったから。あと、面白そうだったから。
「そうだな…　例えば＿＿＿＿＿＿ＰＫギルド同士で連合組んで一大戦争ってのはどうだ？」

第２章

第２１話：蝙蝠の過去と禍根

俺の昔話をしよう。

なんて言っても聞いてくれる人なんて誰もいなかった。だって話したら重くなることは目に見えているし、何よりめんどくさいから。それは俺も同じで、人に過去を放して理解を得ようとするのは全く愚かであると言わざるを得ない。「過去」にどんな栄光があったとしても「今」が駄目なら全部だめ。逆に「過去」が悪ければ「今」の評価も悪くなる。

つまるところ人間は本能的にゴシップを求める生き物なのだ。そこで人間は隠すことを覚え、過去の失敗を笑い話や同情を誘う話にして共感を得ようとする。なかったことにする。しかしそれでも消せない過去というのもあるわけで。例えば嫌われ者だった過去はどうしようもない。そこで本来得るはずだったコミュニケーション能力を養う機会を失ってしまったから。それは手痛い損失だ。ともすれば俺のことを嫌ってはぶってきた者たちが訴えられてもおかしくないほどに。

けれど俺はもちろんそんなことはせず笑い話として、情報ソースとしてみんなに語っ

ている。こうすることで自分の過去だけでなくったことにしているからだ。俺も彼らも過去をなくせてハッピー。これ以上有意義な仕組みはないんじゃないかと思う。

「……　で？結局何が言いたいんですか？」

「頼むから弁解させてくださいお願いします！」

街のカフェで俺はシリカに必死に頭を下げていた。うん。別に頭を下げるのはいやじゃない。頭とはその仕組みからして何もしなければ勝手に自重で下がるようにできているから。だからこそ人間は頭をを下げ続けるのだ！例えば俺の親父のように、今の俺のように！

「弁解も何も、８００００さんは裏切者の蝙蝠。それでいいじゃないですか？」

「まあ、そう思われても別にいいんだけどさ。」

「じゃあ何を弁解するっていうんですか？言っておきますけど動機なんて聞かされても情状酌量の余地なんてありませんよ？」

「じゃあそれでもいいから聞いてくれ。これは今回の件に結構深くかかわってる話だから。」

あくまでそっぽを向いたままのシリカだが、体はこちらのほうを向けてくれた。一応聞いてくれる気はあるようだ。俺は水を一口飲んで口を開く。

「事の発端は3年前にさかのぼる。」

その当時の俺はかなり、というか今の材木座レベルで中二病でオタクだった。これでも高校デビューで脱オタした身だから言えるが、あれはかなりイタかった。・・・ 今もイタいとかは知らない。お前の目が狂ってる。・・・ 目が腐ってるのは生まれつきだ。あとこれでも視力は両方とも2．0はある。話を続けるぞ。

オタクだった俺はネトゲをやっていた。そのうちの一つのＭＭＯＲＰＧで俺はギルマスをやっていた。

ああ。似合わないことぐらいわかってる。それでも事情が事情だったから仕方なくやっていたんだ。

で、問題はそのギルドがＰＫギルドだったってことだ。

「・・・ じゃあ、８０００００さんはほかのゲームでＰＫ常習者だったってことですか？」

「まあ、な。一応ＰｖＰを心がけていたつもりだったが、それでも何人かは不意打ちで殺ったな。」

そのギルドが作られた原因も俺が元凶だ。

その当時、珍しく面倒を見ていた新人がＰＫにあって持ち物を奪われたりした。そのゲームは結構過酷でな。ＰＫ可能、死んだら周囲に一定確率で持ち物がばらまかれる仕組みだった。このゲームでもそうだが、その当時はＶＲＭＭＯなんてまだなかったし顔を合わせずに殺せるからチキンな奴らがこぞってＰＫをしていた。俺はチキン？そう

いう目的でやったことは一切ない。本当だ。信じないだろうけどな。一応運営も対策はしていたが焼け石に水だった。それでも一定量のプレイヤーがいたからゲーム自体は続いていた。

その中でＰＫが起きても抗議するだけ無駄だろ？だから俺は別な方法で対抗することにした。

それがＰＫギルドを創ってＰＫｙｅｒだけ狙うって方法だった。

「それって、相手と同じ立場になるってことじゃないですか？」

「ああ。それでも最低限のルールとしてＰＫｙｅｒだけを狙うことと、同じプレイヤーを連続して狙わないことだけは条件にしていた。それで正義の立場を守ってたんだ。」

「そんなことをしても、助けられた相手はうれしくないと思いますよ？」

「…　ああ。だから、結局は自己満足だったんだ。」

結果的にそのプレイヤーはいなくなってしまった。多分他のゲームに移って楽しくやってると思う。

そして後にはＰＫギルドとギルマスの立場だけが残った。

後は想像がつくだろ？ほかにもＰＫギルドが乱立してあちこちでＰＫが勃発した。それを止めようとして俺たちとほかのギルドで何度も戦って、そのたびに吸収合併して

どんどん大きくなって。

気が付いたらシステム限界の９９９人になってて、俺は他のやつにギルマスを譲った。その直後から受験勉強を始めて俺はそのゲームを引退した。そのあとギルドがどうなったかは知らない。ただ、１年前にそのゲームはサービス終了したってことだけはネットで知った。

「・・・　それならなんでＰＫギルドで全面戦争なんて言い出したんですか。このゲームも同じようにしたいんですか!?」

「いや。今回はそうならないようにする。絶対に成功させる。」

「そんなことができるんですか？私には無理としか思えないです。」

「いや。出来るさ。そのための布石もちゃんと用意してある。」

「・・・・・・・・　安心しろ。シリカたちの居場所を潰すようなことはしない。」

その言葉を信用する人がどれだけいるだろうか。少なくともあんな話を聞かされた後ではまずいないだろう。だから俺はシリカの返事を待たず席を立った。

「俺は先にほかの用事も済ませておく。シリカはもう休んでもいいぞ。」

「・・・　わかりました。」

「じゃあな。」

店を出ると、今まで息をひそめて隠れていたセレビスがひょっこり出てきた

「で、マスター？この後はどうするんですか？まあ、なんとなく予想はついてますけど。」
「じゃあ聞くなよ。こんな人通りの多いところで話せるわけがないだろ。」
「じゃあ聞きませんけど。あ、ここから１キロほど先を西です。」
「了解。ところでお前、なんで戦闘の時に出てこなかったんだよ。あの時バフが欲しかったのになくて苦労したんだぞ？」
「えっ？なんで私がそんな危ないことしなくちゃならないんですか？ヤですよ。」
とことんふざけてるＡＩを小刀の鞘で叩くと、恨めし気な顔でにらまれた。
「お前が仕事しないのが悪いんだろ。わかったら仕事しろ。」
「マスター自身が一番嫌いなブラック会社の社長っぽいですね。」
こめかみをぐりぐりしてやると悲鳴を上げて逃げて行った。何事かと周囲の人たちがこっちを見てきて少し気まずい。なんて思っていたらセレビスは思いっきり舌を出してきやがった。
つまり雇い主に対して反抗プラス職務放棄か。
まるっきり俺じゃん。バイト先の俺と完全に一致。そもそも最初の条件と全然違うじゃん？みんな優しくて歓迎なんて嘘だし、すでに人間関係出来上がってて割り込む余地ないし。カップルの間に割って入って仕事のつまらない質問ができるかって無理に

決まってるだろ！

結論。某Ｍのハンバーガーチェーン店は広告詐欺。ソースは俺。

「マスター、大丈夫ですか？なんか非リアの権化みたいな顔してますけど。」

「よし、お前今から渡す仕事今日中に済ませといて。出来なきゃ残業してくれるよな？もちろんサービスで。」

「めっちゃブラックです!?」

第２２話：一色いろはは黒く嗤う

さて。シリカがどう動くかは別にどうでもいいとして。

俺は俺で知り合いに片っ端から声をかけていかなければならない…　悲しいことにリアルの知り合いに、だ。

とりあえず最初に声をかけたのは一色いろは。俺のかわいい（ただし見た目に限る）後輩だ。

「なあ、一色。ちょっといいか？」

「何ですかそれって告白ですかごめんなさい好きな人がいるので無理です！」

「で、今日部室に来る前に図書室によってくれるか？」

「スルーですか!?」

だってそろそろ飽きたし。持ちネタ一本化はすぐに廃れるぞ？

「よりによって持ちネタ扱い!?それを言うなら先輩の『ソースは俺』だっていい加減飽きられて…」

「俺のはそこそこ汎用性が高いからいいんだよ。お前のは用途が限られてくるだろ。」

「だからって持ちネタ扱いはあんまりです！これだって私が頑張って編み出した――

「じゃ、放課後よろしくな。」

そろそろ面倒くさくなってきたので適当に切り上げてその場を後にする。一色はギャーギャー言っていたがあいつは多分来てくれるだろう。ああ見えて予定とかには律義な奴だし。

そして放課後。図書室にやってきた一色を手招きして座らせる。

「で、何の用ですか？私に用事なら部室で言えばよくないですか？」

「いや、今回は少し雪ノ下達には秘密で動いてる。まあ、これも雪ノ下のためではあるんだけどな。」

「はあ…。まあいいです。話してください。そのうえで断るか辞退するか決めます。」

「どっちにせよ断っちゃうんだ…」

すると一色はニコッと笑った。

「冗談ですよ。冗談。センパイの物まねです。」

「いや、俺そんなこと… 言いそうだな。」

若干あきれた様子の一色を前に程よく緊張感が霧散する。こういうのもある種の才能なんだろうか。だとしたら斯くも社会とは不平等だ。障がい者に対して保護が叫ば

れる中でコミュ障は保護されない。まあ、ある種保護はされてるけどな。腫物でも扱う様な空気でみんな特別待遇してくれる。やったー！僕の分だけニンジンが多いぞ！

（千葉県のとある男子の中学校生活）

一色に一通りの事情を話し終えて返事を待つ。一色は考えたのちにこう切り出した。

「それって、私に何かメリットってあります？」

来た。これが今回の山場。一色にいかにして興味を持ってもらえるようなプレゼンをするか。

本来縁遠いゲームをいかに面白く思わせるかが今回の作戦の重要なポイントだ。

「いろいろあるが…　まず、葉山も参加する。」

「当然です。」

…　これは予想外の反応が来た。当然か。葉山の参加は前提条件。となればこの後がいろいろ厳しい…　逆に考えれば葉山との絡みを押し出せば行けるかもしれない。

「例えば、葉山と模擬デートができる。」

「ふうん？どういうことですか？」

目が完全に本気モード入ってる。いつもとは全く違う雰囲気に少し気圧されるが、ここで止まってなどいられない。

「このゲームではいろんな町があって、そこを自由に歩ける。そして当然買い物やカ

フェで食事もできる。さらに服装も現実じゃありえないようなものから普通の服まで、幅広くある。しかも、これを持ち運び無しでいつでも着替えることができる。」

「なるほど…　つまり、葉山先輩好みの服装を探すことが出来るってことですね？」

「そういうことだ。ついでに服は既製品からドロップアイテム、果てはオーダーメイドまで多種多様だ。一応、オーダーメイドの店は一軒押さえてある。」

一色は黙ったまま黙考している。黙っているのでそのまま話を進める。

「さらにもう一つ。今回の一件に乗ってくれたら雪ノ下と雪ノ下さんに恩を売れる。これを使えば一回ぐらいは葉山をデートに呼び出すことができる。もちろん現実のに、だ。」

ここで一色が少し反応を示す。やはり釣れたか。これには絶対乗るはずだ。何せ二人きりが保証付きのデートなんてそうそうないからな。

「っ…。でも、それだけならほかにでも方法はありますよね？」

「ああ。そうかもしれないな。」

嘘だ。雪ノ下さんのバックアップなしに葉山を確実に一人にすることは無理だ。おそらく一色もそれはわかっているはずだ。それでも反抗するのはせめてもの意地か。

「ならもう一つ。」

「何ですか。」

「いまなら、葉山と一つ屋根の下で過ごせる。」
「乗ります。」
即答だった。今までの意地なんて嘘だったかのようにくるっと手のひらを返した。
「で、詳しく説明してください！」
「ちょ、顔が近い！」
慌てて一色から距離をとるが、さらにずいっと距離を縮めてきた。由比ヶ浜と言い一色と言いなんでこうも顔を近づける癖があるんだ。
「で、ゲーム内っていうのはわかっています。それ以外に説明してください可及的速やかに！」
「キャラが変わってる！キャラを直せ！」
互いに若干混乱しながらも俺はキリトからきいた話をそのまま伝える。
「このゲームにはマイホームが持てるシステムがあるんだが、その持ち主がゲームを辞めたり何らかの事情でお金が必要な時に売られたりするんだ。それがいま、権力者が失脚したことでその周囲も金欠で家を捨て値で売っているらしい。しかも家具付きで。」
そして俺は計画を一色に語って聞かせた。まず金を集める。これに関しては別枠で用意しているから問題ない。また、維持費もそれなりにかかるのが問題だが、これに関

しては葉山も受験でゲームに参加するのは実質1ヶ月程度。つまり全く問題にならない。最期に葉山をゲームに呼ぶ方法。これは由比ヶ浜がもうてまわしをしてくれた。雪ノ下のためならと即断してくれたそうだ。

これを聞いた一色は少しの間考えると、俺に手を伸ばした。

交渉成立だ。

俺と一色が悪代官の笑みで握手をしていると、それを見た一年生が小走りに図書室を出て行った。

ちなみにこの一年生は、その後クラスで生徒会長が何やら裏工作をしているとうわさを流した。これによって一色は誤解を解くのに奔走するのだが、それはまた別のお話。

２３話：やはり材木座が強いのは間違っている。

「ところで、材木座。ちょっと特訓付けくれ」
「うむ。それは別によいのだが…」
「だが？」
「その、ほかの門下生たちが黙ってないと思うぞ…？」
「大丈夫だ。そこは何とかする。」
…　なんて思ってた時期が俺にもありました。

「死ねええええええええ!!!」
気勢を上げて飛び込んできた相手を間一髪でかわす。と、そこに新手が飛び込んでくる。
とっさに煙幕を張って離脱しようとしたが、煙幕の外にも敵がいた。
こうなったら上…　と思うがとっくに制空権は取られている。むしろ空対地攻撃が

雨あられのように降り注ぐ。

「ちっ!!」

仕方なく武器を奪って足止めをしているが・・・　正直此処まで数が多いとあまり意味がない。一対一で無効化しても即座に援護が入る。

しかし、少しでも手持ちにできるなら応用のしようがある。

例えば、こんな風に。

一瞬、敵の上空に飛ぶ。そして、ストレージを一気にばらまく！

名付けて疑似ＵＢＷ。もっとも、武器をばら撒いているだけだが。

一瞬下のやつらの勢いがそれる。そして上空から降ってくるものに対して、とっさに頭を守ろうとする。

後は、がら空きになった側面を突き崩す。

「吹　き　飛　べ　！」

小刀から出した突風で吹き飛ばす・・・　が、やはり何人かは残ってしまい、仕方なく再び逃走開始。

これの延々繰り返しで、先に力尽きるのは絶対に俺が先なんだよなあ・・・

「セレビス。こっから非戦闘地帯への最短ルートは。」

「はいはーい。２００メートル先を右折。そっからは遮蔽物が多いところを一気に駆

け抜けますよん…　ってか、まだ逃げるんですか。」
「当然だろ。捕まったら一巻の終わりだぞ!?」
「別にホントに死ぬわけじゃないからいいでしょーに。あ、上から使い魔一匹発見。こっちに接近中ですね。」
「くそっ!?あいつら予想外に連携が取れてる!もっとこう横のつながりが薄いと思ってたのに!」
必死に走りまくって山道を一直線に駆け抜ける。と、そこで突如後方が爆発した。
「何だよ今度は!?」
「空爆部隊の到着ですね。ちなみに、ヒーラーが中に３人ほど混ざってますね。帯刀してますけど。」
「あいつら全員アスナの知り合いとかじゃないだろうな!?なんでヒーラーが杖も持たず刀持ってんだ!」
悪態を吐いてもこの差を埋めることは難しい。こうなったら一か八か…。
「セレビス!この付近にダンジョンはあるか。出来れば高難易度がいい!」
「あー、近くにちょうどいいのが一件ありますけど…　やめといたほうがいいですよ？」
「今はそれどころじゃないんだ!早く逃げるぞ!」

「はあ…。わかりました。じゃ、そこを左に１００メートル。後、直進２００メートルで到着です。」
「わか…。くそっ！なんで揃いも揃って頭ばかり狙ってくるんだ！」
「ゾンビに有効だからでは？」
とっさに飛び込んだダンジョンは、石室のような場所だった。
「ここは… 古墳か？」
「はい。マスターのお仲間の寝室で… 痛っ！」
「事実だとしてもあまり言うな。生まれつきだ。」
「事実なのは認めるんですね…。ちなみに、マスターの子供はヘルみたいになるんでしょうかね？」
神話の神様が生まれるのかよ。すげーな。ただし、おまけでフェンリルとヨルムンガルドあたりが世界滅ぼしそうだけど。
「で、責任をとらされるまでがお約束ですね。」
「言うな。ほんとにそうなったらどうする。」
「マスターが、今のマスターの親御さんみたいになるのでは？」
「社畜じゃねえか！」
セレビスはご愁傷さまですというかのように瞑目すると、先を先導し始めた。

ダンジョンの中は暗くじめじめしていて、ゾンビとスケルトンであふれかえっていた。

「マスター。初めてのお友達候補ですよ?なんで倒しちゃうんですか。」

「友達候補とかいうな。しかもこいつら無駄に強い・・・！」

「こざかしいデバフ使うあたり、マスターの将来説に一票。私的にポイント高いですね。」

「小町の真似をするな。あいつはそんなことを言うような奴じゃない。」

まあ、ごみいちゃんとか言われる当たり反論は難しいが・・・。

・・・しかし、本当にこのダンジョンは難易度が著しく高いな。緊急で避難したとはいえ、かなりきつい。まあ、さっきの信者たちに比べたらましだが・・・

「あ、マスター。この先をしばらく進むとボス部屋ですよ。」

「・・・回避はできるか?」

「可能ですけど、帰るのが大変ですよ?サクッとボスに殺されたほうがましですね。」

・・・ここで死んで復活したら、それこそ雪ノ下あたりに本物ゾンビ扱いされかねないな・・・

そして今以上にゾンビキャラが板につきそうだしな。最悪、戸塚あたりにまで言われ

たら俺も泣きそうになる。
「よし、何としても突破するぞ。生還は絶対。支援は任せた。」
「はいはーい。わかりましたよーっと。」
「(ところで、この先って迷路みたいですけど・・・ ま、大丈夫か！何せ私がいますし！口調変えてから調子いいですし、これはユイ先輩に感謝ですね。)」

「うん？どうした、お前たち。確かここに８００００が来るはずだったが・・・ ？なに？追い払った？で、どこに逃げ・・・ 近くのダンジョン!?・・・ あそこは、高難易度かつ迷子率の高さで一部にしか知られていない厄介な奴なんだがな・・・」
弟子からの報告に、材木座は頭を抱えるとすぐさまキリトに連絡を取った。
「うむ。キリトか。少し、我の弟子が８００００を追いかけて、ダンジョンに潜らせてしまったようでな。それもとびきりの複雑な地形のに。で、我と汝であいつを探したいのだが、今から暇か？」
「ああ。大丈夫だ。ついでに、何人か呼んでいいか？人が大いに越したことはないだろうし。」
「ああ、かまわんぞ。こっちも何人か弟子を連れていく。じゃあ、よろしく頼むぞ。」

「で、今から８００００を救出に行きたいんだけど…。シリカ、頼めるか？」
キリトの頼みに、シリカはうなずきかけるが、８００００との別れを思い出して、渋い顔になる。
「…　８００００さんですか。」
「あれ？シリカちゃんヒッキーに何かされたの？」
「被害受けたことは前提なのね…」
由比ヶ浜の問いにアスナが少し苦笑いする。一緒にいた雪ノ下はいつものこととでもいうように慣れた様子でお茶を飲んでいる。
「いや、８００００が入ったのって、ゾンビ多発地帯なんだよな。だからいやなら無理強いはしないけど…。」
「いえ、それぐらいは別に…　って、ゆきのんさん!?どうしたんですか急に!?」
突然雪ノ下は机に突っ伏して、必死に口からお茶が零れるのをこらえて悶絶していた。
「比企谷君が、ゾンビに追われ…　くくっ。」
「あー。うん。確かにシュールだね…」
二人とも、ゾンビ同士の鬼ごっこを想像して笑いがこぼれる。
「…　まあ、８００００さんの醜態が見れるなら私は行きますよ。」

「そうね。こんなの一生に一度見れるかどうかの貴重な光景、見逃すわけにはいかないものね。」
「シリカちゃんとゆきのんが怖い・・・　！」
そのやり取りを見ていたキリトは、手早く装備を固めると早速出発しようといった。
「今回は多分かなりギミックが複雑だと思うけど、先に何か質問はあるか？」
「あ、そういえば、一つ前々から疑問に思ってたこと聞いていいかな？攻略とは全然関係ないんだけど。」
「何かな、ゆいゆいさん？答えられる範囲なら答えるわよ。」
アスナが静かに微笑むと由比ヶ浜はかねてからの疑問をぶつけた。
「リビングデットって、なんで家でもないのにリビングなんですか？」
その質問に、立ち上がりかけた雪ノ下がよろけてずっこけた。
アスナはどう答えたらいいのか迷っているようで、キリトとシリカはおなかを抱えて床を転げまわっていた。
どうやら、救助はもう少し先になりそうだ。

第２４話：比企谷八幡は迷いながらも進み続ける（物理）

ゲームのボス戦は比較的良心的だ。なぜなら予めボスの出現が予測できるから。

それに対して現実は恐ろしく容赦がない。突発的な戦い、勝利条件の不明な争い。挙句の果てには買ったら負けのイベント。

ストーリーは分岐が複雑怪奇で伏線すら張られずにイベント即突入。そしてやり直しにセーブ地点は無し。

キャラメイクは運ゲーでやり直しは部分的にしか不可。それすらもキャラの立ち位置によってはできない。

天は二物を与えないというが、あれはある意味正解だ。キャラのステ振りの際に所持ポイントが偏ったもの、それが才能だと思えばいい。そして一方に偏れば当然どこかで釣り合いを取らねばならない。そこで短所が調整役として登場する。

ただし、ここで大事なのは天は人の上に人を創るということだ。

さっきの例でいくと所持ポイントの個人差。ある少年は３０ポイント持っていて、それをランダムで振られる。その際、大抵は均等に分けられ、役に立たない死にスキルが多く出た。結果、クラスで最底辺のカーストとなった。

もう一人の少年は１００持っていて、同じく均等に分けたけれど一個あたりのポイントが高いから優秀となってクラスカースト上位となった。

これが格差の原因。つまり何が言いたいかというと、神様の乱数表は偏りすぎている。いい加減アップデートしろ。詫び石配れ。同じイニシャルでここまで差が開くとは乱数表の設計ミスだろ。誰とは言わないけどな！

結論。人生はクソゲー。

「で、そんなことをずっと考えていたんですか。ここまでの道中ずっと。」

「ゲームのキャラクターにだけは言われたくないな。」

所はダンジョン。地下大迷宮古墳（仮称）。さっきからゾンビが大量に湧いてきていて正直もううんざりだ。

「お仲間をそう言っては可哀そうですよ。せっかくですから仲良くしましょうよ。」

「仲良くしてください（棒）」

ゾンビたちは仲良く土に帰った。合掌。

「ていうか、さっきから大量にお金落ちてますけど結構な額になってますよ？」

「は？いや、そんなに強敵倒した覚えは・・・」

「デュラハンを１８体、エンシェントゴースト３０体、ゾンビ５０。ゴーストも５０。

ちょうど今3時間経過しましたよ。そろそろ休憩を挟まれたらどうです？リアルの体にも負荷がかかる頃合いですし。」

言われて時間を確認してみれば、そろそろ夕食の時間だった。危ない危ない。危うく飯を食いはぐれるところだった。我が家では、夕食に遅れたものに追加の慈悲はない。自力で作るか、買って来るしかない。ただし男性に限る。

「んじゃ、次のセーブポイントでいったん落ちる。案何を頼む。」

「すみません、次のセーブポイントはこの先のボスを倒した後です。」

「内容は？」

「鬼のように固いゴーレムですね。」

「」

結局、進撃になった。まあ、部屋にポーション（マッカ）と戦闘食糧（カロリーメイト）があるからしばらくは戦えるんだが。

ああ、この後で小町に文句を言われるんだろうな・・・。

そう考えると、さっさと進撃して片付けるべきだな。

「戦闘開始だ。セレビス、援護を頼む。」

一方そのころキリト達はと言えば。

「きゃっ！お、お化け…」
「…　所詮、０と１でできた存在よ。なにも、怖がることなんて…　っ。」
「キリト君。先行よろしくね？」
「…　わかったよ。義輝も頼む。」
「うむ。承知した。」
「き、キリトさん！あそこにゾンビの死体が転がって…」
「「うわあああああ!?」」
阿鼻叫喚の地獄絵図だった。
もうダンジョン進行どころではなく、明らかに人選を間違えていた。
「…　なあ、義輝。もういっそ何人か帰すか？」
「いや、今更戻したところで迷子が増えるだけだ。諦めて進むしかない。幸い、俺たちが盾になれば女性陣はそこまで怯えなくて済む。」
「ああ、そうだな…。仕方ない、進むか。」
しかし、ゾンビの死体が一定区間ごとに女性陣の目に入り進行はたびたび中断された。
１時間もすると、最初にシリカが違和感に気づいた。
「あ、あれ？そういえば、さっきからゾンビの死体って、定期的に落ちてますよね？」

「ああ。言われてみればそうだが、それがどうかしたか？」
「いえ、普通モンスターの死体はすぐに消えるから、オブジェクトなのかなーって。だとしたら相当悪趣味ですよね。」
「ああ・・・。ん？待てよ。あれは確かにこのダンジョンに出没するゾンビだった。オブジェクトはしたいじゃなくて白骨ばかり。・・・　そうか！ユイ、この死体を調べてくれ。もしかしたら、８００００たちの向かった先がわかるかもしれない。」
「はい！えっと・・・　あ、ビンゴです！明らかにモンスターの死体がオブジェクトとして固定されてます。これを操作したのは、きっとセレビスさんですね。帰り道の目印代わりでしょうか？」
「ああ。きっとそうだ。追われてることを考慮すれば、きっとセレビスの独断だろうな。」
「・・・・・・・・　死体を使ってヘンゼルとグレーデルの真似事なんて、悪趣味ね。さすがゾンビの妖精というだけはあるわね。」
「ゆきのん、セレビスちゃんは悪くないよ。気づかなかったヒッキーが悪い。」
「そもそもこんなところに逃げた８００００君が悪いわね。」
「その前に喧嘩を売っておきながら逃げ出した８００００さんの態度と性格と容姿が悪いですね。」

「それなら一つ提案なのだけれど。いいかしら？」
何やら雪ノ下が酷薄そうな笑みを浮かべる。
「これから、このゾンビたちを比企谷君だとおもって倒していかないかしら？そうすれば怖くないし、きっと本気を出せるでしょう？」
「「さんせーい」」
三人とも乗り気に武器を取り出す。その目は殺意にらんらんと燃えていて、男子勢は身震いをし、心の中で８００００に合掌した。
その後、彼女たちが通った後には延々とゾンビの死体が続いていた。その時の様子は、今でもユイの記憶データーベースの最深層に厳重にロックがかけられたいる。

ところ変わって８００００たちは。
「!?」
「どうしたんですか？急に顔を青くして。」
「いや、急に寒気が・・・」
「・・・ これは、ちょっと急いだほうがいいかもしれませんね。」
「ああ。先を急ごう。」
結局、ペースを上げて３０分ほどかけてボスを倒した８００００たちは、急いで

セーブポイントに入ってログアウトした。その間、８００００の体はセレビスが厳重に隠ぺいしていた。

そのせいで、幸か不幸か雪ノ下達が通り過ぎて行ったのには、互いに気づくことはなかった。

第２５話：比企谷小町とログインエラー

「…　さて、飯でも食べるか。」

リアルに復帰してしばらくは体がなかなか動かない。何というかバーチャルの体とリアルの体の感覚を合わせているようなそんな奇妙な状態の中で、しばらくボーっとしている。そもそもは材木座に稽古をつけてもらうはずだったのにいつの間にか自主練をしているのはどういうことだ。というか、あの信者たちのバーサクぶりがかなり印象に残っていてしばらく思考がまとまらない。

「あ、お兄ちゃん。またずっとゲームしてたの？早くお風呂入らないと私が入れないから早く入ってよ。」

「ん？ああ。わかった、今入る…　っとと。」

体に力が入らずに若干よろけると小町が心配そうにこちらを見ていた。

「お兄ちゃん、ゲームのやりすぎはよくないよ。ふらふらになるまでやるとか中学の頃そのままじゃん。」

「今はゲームの中でリアルの知り合いと連絡が取れる時代なんだよ。それに雪ノ下や

由比ヶ浜もやっているぞ。」
「えっ!?あの二人も?・・・　むむ、これは小町も早速ゲームにログインしなきゃ・・・」
「お前は勉強してろ。」
受験生がゲームとかシャレにならない。大体今の成績で全力で頑張って頑張って合格ラインのやつが遊びを覚えたら速攻で転落する。だから俺ですらゲームとラノベをすべて封印したというのに、この妹は・・・
「おまえ、俺の中学時代よりもひどいぞ。」
「うわっ。今すごい暴言吐かれたんだけど。中学時代のごみいちゃんよりもひどいとか、小町的に超ポイント低いよ・・・」
「お前も大概だ。そもそも昔の俺よりも成績悪い奴が何を言う。」
「・・・・・・・・　あ、私ちょっと用事があるから下に降りとくね。」
逃げた。明確に逃げた。そこはせめて勉強ぐらい言っとけよ・・・
俺は呆れながら風呂に入りに小町の後を追って下に降りる。
１階では小町が一人カマクラと戯れていた。
「ねー、カマクラ聞いてよ。ごみいちゃんがね、私を人間以下のクズってバカにしてきたの。」
「にゃあー」

「それでね、私に勉強しろ勉強しろって保護者ぶっていろいろ押し付けながら、自分はずっとゲームしてるんだよ。酷いと思わない？」
「うにゃあ」
「ねー？カマクラもそう思うよね。」
…　どうやら、小町の中で俺の中学生時代の印象は最悪らしい。まあ、全くもって反論できないのがつらいところだが。
さて、風呂に入って今後の作戦を立てるか。

「…　よし。お兄ちゃん行ったね。」
これから私は大事なことをします。具体的には、親がいない隙を見計らってほんの少しだけアミュスフィアに入っているゲームであそb…　もとい、どんな内容かチェックします。
「これは悪くないことだから、全然問題はない…。うん。大丈夫。」
ゲームにログインすると早速お兄ちゃんのキャラを選ぶ。ふーん。割とリアルそっくり。ちょっとこっちの方がイケメン？でも目が腐ってるから結果的にはトントンか。
「あれ？そういえば、これって性別がどうこうって聞いてたような…　？」
よく覚えていないけど、何か性別で制限があったはずなんだけど…　思い出せない。

まあ、いいや。

「よーし！それじゃあ早速しゅっぱーつ！」

私は、空を飛ぶことを楽しみにログインしていった。

思えば、この時が一番楽しい時間だったと後になって回想することになるけど、それは別のお話。

「ん？なんで俺の部屋の電気が・・・　って、小町!?しかも俺のアミュスフィア・・・」

どうやら微塵も反省していなかったらしい。せめてあと一か月ぐらい待てなかったのか。

・・・　まあ、無理か。こんな絶好のおもちゃを見せつけてしまった俺にも責任がある。

仕方ない。ここは３０分ぐらいは見逃してやるか。

のちに、俺はこの判断を悔やむことになるのだが、それはまだ先のお話。

第２６話：比企谷小町とログインエラー。続

私がゲームにログインするとき、思いっきり空を飛んでみたいと思っていた。
そして私は今、広い迷宮の中にいる。
「お兄ちゃん…。私を騙したね!?」
「マスター、どうしましたか?」
急に声をかけられて振り向くと、そこには小さな女の子は浮かんでいた。もしかして妖精?
「マスター、もしかしてついに脳まで腐っちゃいましたか?だとしたら非常に残念無念ですが不肖私が介錯を…。」
訂正。この子は悪魔だ。
というかお兄ちゃんはなんでこんな口の悪い子と知り合いなんだろう。… あ、お兄ちゃんの悪影響を受けた被害者の可能性も有る…
「むむ?これはバイタルデータが少し異なりますね。一応誤差範囲内ですが… この様子からすると、あなたはマスターの妹さんですか?」
「うん。ちょっと勉強の息抜きに遊びに来てみたんだ。あなたは?」

「私はマスターのナビゲーションピクシーのセレビスです。簡単に言えば、便利な使い走りですね。」
「使い走りって…。」
私が呆れてお兄ちゃんとの関係を問いただそうとすると、奥から足音が聞こえてきた。
「ゆきのん、見つかった?」
「いいえ、まだよ。どうやらいつものように空気になったらしいわね。それならいっそ千の風に下上げようかしら。」
「それって八つ裂きどころの騒ぎじゃないような…」
どこかで聞いたことのある声だった。もう少し近くに行けば…
「だめですよ!」
突然セレビスちゃんに止められた。事情を聞くに、お兄ちゃんが何かしでかして逃亡の身になったらしい。
「あのごみいちゃんは…」
「あ、その呼び方いいですね。ごみいちゃん。ぜひマスターにたくさん言ってあげてください。」
「セレビスちゃん、結構口悪いよね…。お兄ちゃんの影響?」

「8割方そうですね。そもそも名前からして『卑屈』ですし。」
うわ、名づけすらひねくれてた…　でも、これはこれで面白そうなコンビのような…
なんて思ってたらすぐそこまで結衣さんたちが接近していて慌てて身を隠す。よくわからないけど、気配遮断と擬態をかけてやり過ごそう。
「なんだかんだ言って兄弟同士思考回路は似てるんですね。」
「それって絶対ほめてないでしょ。」
「皆さんのマスターに対する評価ってどうなってるんですか!?あまりに低すぎませんか?」
「だってお兄ちゃんだもん。」
「衝撃の回答!」
それでも結果的にはみんな納得するから間違いじゃないんだけどね。一応フォローすると、自分を犠牲にしてでも周囲の手身に動く癖がある。
こういえば聞こえはいいけど、いつになったらお兄ちゃんは気づくのかな…
「!?ねえ、あそこ。少し不自然じゃない?」
「え?どこどこ?」
「あ、あそこね。少しついてみましょうか?」

「そうね。じゃあまずは私から」
そういって結衣さんたち三人がこちらに寄って来た。
ところで、みなさん完全装備過ぎませんか？片やレイピアで大技の構え、片や魔術の詠唱。え、即死のやつです？
私とセレビスちゃんは冷や汗をだくだく流しながら必死に逃げ道を探っていた。
「（こ、ここから脱出する裏の抜け穴とかないの？ダンジョンによくあるってお兄ちゃんが言ってたんだけど!?）」
「（駄目です…　あちらのナビゲーションピクシーのほうが一枚上手です。完全に退路を断たれてます。）」
うっわあー…　これって詰みじゃん。ごみいちゃんホントになにしたの!?もう、こうなったら一か八か…
「み、みんな、少し話を聞いてくれ！」
私は気配遮断を解いて弁解を試みた。しかし、恐ろしい圧に早速心が折れそうになる。
「わた…　俺がお前たちに悪いことをしたのは謝る。だからその手を下げて…」
ジャキイイン!!
のど元にレイピアが突き付けられただけだった。

「ねえ？８００００君。私たち、あなたを追ってお化けとか苦手なのをこらえてまで必死に探しに来てあげたんだよ？」
「う、うん。ありがとう。」
「でもね。８００００君は、私たちの通るルートに一々ゾンビの死体を残していったよね。あれってどういうつもりなの？」
「⁉し、知らないよ！そんなこと。セレビスちゃん、何かした？」
「ヒューヒュー（口笛）」
犯人この子だー⁉真犯人が実は相棒って衝撃的すぎるんだけど！小町的にポイント乱降下しすぎ！
「ほ、ほら。真犯人も無事捕まったことだし、ここはもう場を収めて…」
「…　８００００さん。」
セレビスちゃんを生贄に場を収めることに成功しかけたところに水を差したのは茶髪の猫耳の女の子だった。
彼女は私を少し似らうようにして問い詰めてきた。
「あのＰＫギルドとの話し合い、どういうつもりなんですか！」
「え、ええ？」
「ＰＫギルド同士で戦争なんて正気の沙汰じゃないです！絶対に裏で不正をする人や

暴走する人も出ます。それに・・・　８００００さんはどうなるんですか!?すべての元凶として吊るし上げられてもおかしくないんですよ?そのままＡＬＯをやめることになっちゃうかもしれないんですよ?」

彼女は、真剣に怒っていた。真剣に考えて、怒って、お兄ちゃんのことを心配していた。

なんだ、意外といい友達持ってるんじゃん。ちょっと小町的にポイント高いかな。

だから、ここはたまったポイントで特別サービスをしてあげよう。

「ああ、でもそれは結果的に皆のためになることなんだ。」

お兄ちゃんのひねくれた口調をまねてみる。だてに妹を１５年やってるわけじゃない。このぐらいお手の物。

「それに、リアルの俺は来年受験生で、どうせ１年は休むことになる。その間にほとぼりは冷めるさ。」

ここまではお兄ちゃんの真似。だけど、その先は私のサービス。

「それに、この方がお前のためにもなっただろ?」

「え?私のため?」

「ああ。そうした方が一番お前が安全だったから、そうした。それだけだ。」

「・・・　ッッ～～～～～」

よしよし。状況がよくわからなかったから適当に誤魔化してみたけどうまくいったみたい。

まあ、あとはお兄ちゃん次第かな。このままうまくいってくれたら私としてもおさっけようしなくて済むからありがたいんだけどな。

こればっかりはお兄ちゃんとこの人の問題だから。

「あ、そろそろ俺は一旦ログアウトしなきゃいけないな。ここまで来てもらって悪いんだけど、もう少し待っててもらえるか？」

そろそろ時間がやばいしこのまま帰ろうとすると、雪ノ下さんに呼び止められた。

「今度はちゃんと遊べるようにしておくから、いつでもきていいわよ。」

…　なーんだ。ばれたんだ。なら、今度は勉強ついでに遠慮なくお邪魔させてもらおう。

「了解。じゃあ、またね。」

こうして、私はＡＬＯの世界から現実世界へと戻ってきた。

うーん。それにしても体が重い。これがお兄ちゃんが疲れてるように見えたやつか。これなら納得。現実の感覚に体が順応していくみたいな感じ。

「さーて、勉強勉強…　あれ？」

机にはなぜかお兄ちゃんが寝ていた。もしかして、最初からバレてた？さらによく見

ると、私の体には毛布が掛けられたいた。冬場の寒さで風邪を引か荷ないようにとの配慮だろうか。

「お兄ちゃん、変なところで気が利くなあ。」

「ん・・・　ん？」

「あ、起きた。」

私の顔を見て大きくあくびをすると、少し厳しめの表情で叱ってきた。

「受験生がゲームなんてするものじゃありません。」

「・・・　お母さん見たい。」

「そうか？まあ、専業主夫を目指すものとして誉め言葉として受け取っておく。」

褒めてない褒めてない。

「あ、そうそう。これ、結構いい息抜きになったよ。」

「ならよかった。」

実際は空も飛べなかったし、モンスターも倒せなかったけど、お兄ちゃんの弱みは握れたし、上出来かな。

「なんか悪だくみをしてそうな顔だな。」

「してないよ～。あっ、そうだ。」

一通りさっきの事情を伝えておかなきゃ。混乱したり矛盾を起こしたら怪しまれ

ちゃうし。
「さっきね、茶髪の猫耳の子の一件フォローしといたから心配しなくてもいいよ。」
「シリカのことか？ふうん・・・。まあ、ありがとな。」
「大丈夫だよ。それよりさ、お兄ちゃん。」
「何だ？」
「シリカちゃんと、うまくやっていきなよ？」
その言葉に含められた意味に敏感に気付いたお兄ちゃんは慌てた様子になった。
「まて！何を吹き込んだんだ!?」
「えー？いろいろだよ！」
「具体的には？」
『お前が一番安全だったから』
「!?」
絶句するお兄ちゃんを置いて、私はお風呂へと逃げ込む。
「よーっし、お風呂入らなきゃ。」
「ま、まて！」
当然無視して進んでいく。その時のおにいちゃんはいつ思い出しても笑っちゃうほど情けなかった。

きっとお兄ちゃんだし、また壁を創って逃げようとするんだろうな。で、それをシリカちゃんが追いかける。

普通の人だったらダメダメだって笑っちゃうような光景だと思う。

でも。

「お兄ちゃんもシリカちゃんも、頑張ってね？」

やっぱりお兄ちゃんのラブコメは間違ってないと思う。

27話：鼠と蝙蝠の邂逅

「で、いつになったら私と葉山センパイの家は用意してくれるんですか？」

「…　悪い。もう少しだけ待ってくれ。」

その日、俺は一色に早くホームを用意するよう催促されていた。最近はいろいろ立て込んでいたからか正直忘れかけていた節がある。

何はともあれ、ここで一色の機嫌を損ねるわけにはいかないので平身低頭してすぐに用意することを約束した。

一色は「約束、守ってくださいね？」と半ば懐疑的な目線だったが引き下がってくれた。

「あ、それでですね。最近葉山センパイがよく紅茶を飲んでると聞いたんですけど、先輩はどうですか？」

「紅茶？雪ノ下が用意してくれてるからある程度はわかるが、それがどうかしたか。」

「ならよかったです！じゃあ、明日の2時に千葉駅前よろしくです！」

「はあ!?いや、ちょっと待て。明日は土曜日だしプリ…　映画を見行く予定なんだ。悪いが他を…」

「先輩？」
「おわっ!?」
グイっと下から覗き込むように視線を合わせてくる。ちょ、目が怖い怖い！ハイライトさん仕事して！
「先輩に、拒否権があると思いますか？ましてや仕事を放りだした先輩に休みがあるとでも？」
「ございません・・・」
「分かればよしです。じゃあ、明日はよろしくお願いしますね？」
そういうと一色はにこやかに去っていった。・・・　あいつ、生徒会長になってから妙な心理的な駆引きを覚えたな・・・。デビルいろはす怖い。
しかし、これ以上一色のホームの件を放置すれば俺の身が危ない（精神的な意味で）。社畜のごとく働くとしますか・・・。ところで最近、社畜体質になってきてるような・・・。き、気のせいだと信じたい。

「ふーん。それで、オレっちに相談しに来たって訳カ。」
「キリトに聞いたら紹介されたんだ。ゲーム内においては最も信頼できる情報屋って触れ込みでな。」

「んん？うたがってるのカ？人を見た目で判断するのはよくないゾ。」
「いや、単に俺の希望物件が存在するかって話だ。」
「そういや希望を聞いてなかったナ。どういった内容をお探しなんダ？」
「・・・　３人用かつ内二人が迂闊に出くわさないような物件。」
こうなったのには一つだけ理由がある。
葉山に協力を頼むときになぜかあーしさんまで付いてくることになったからだ。
うっかりあーしさんと一色が出くわす修羅場フラグにしか見えない。葉山が止めるかと思いきや笑顔で承諾。おかげでこっちに面倒が回ってきた。急な条件変更のせいで当初あった候補は大半が没になった。
「フーン？訳アリなんだナ。ま、深く聞かないでおくケド。」
「そうしてくれ。こっちは資金の工面もしなくちゃならないからあまり余裕がないんだ。」
「ちなみに予算はいくらホド？」
「１０００００００ほど。」
「⁉　そ、そんな大金どうやっテ・・・」
「企業秘密。まあ、１、２週間もあれば貯まるだろ。」
「・・・・・・・・　８００００って、恐ろしく腹黒カ？」

完全に恐ろしいものを見るような目つきになっていたが、手元のスクリーンだけは高速で動きしばらくすると指を止めた。

「・・・あっタ。ウンディーネ領の海沿いの豪邸。オーナーの趣味で仕掛けが豊富。さらに防音にも優れル。部屋は１５部屋。」

「悪くないな。価格は？」

「５０００Ｋユルド。」

「よし。そこにする。情報料はいくらだ？」

「まだだヨ。ちゃんと現場を見に行ってないからそのあとでいいヨ。」

自分の情報に自信を持ったうえで初めて取引をする、か。それなりに信用してもよさそうな情報屋だな。

虚偽の情報を売りつけるようなことはしないとキリトからきいていたが、仕事人気質？のような自分の中のルールがあるのだろうか。だからこそキリト達から信頼を置かれているわけだ。

「じゃあ、それに俺もついて行ってもいいか？」

「もちろんだヨ。クライアントの目でしっかり確認してもらった方が早いからナ。」

それからしばらく俺とアルゴはウンディーネ領まで飛んでいた。アルゴは飛行操縦もうまく、危うく置いて行かれそうになり慌てて加速しなければならない程だった。

ＡＧＩ全振りで育成したらああなるのかとでも思いながら聞いてみると１００００ユルドと言われた。そこら辺はやはり商売人と言ったところか。

しばらくして到着したのは海沿いの大きな家だった。確かに海は見えるし雰囲気も悪くはない。ただ、一つ何点を挙げるとするなら・・・

「なあ、ここら辺モンスターの出現率が高くないか？」

「・・・　そうだナ。少し調べてみるカ。」

しばらくの間俺たちは周辺を散策してみた。お互いに気配遮断は高いのでなるべく戦闘は避けるようにして進んでいた。すると、しばらくして湿原が見えてきた。そしてその周囲の森からは大量の邪神級モンスターが出現していた。

一体一体がかなりの脅威で、少なくとも材木座やキリトがいなければ突入は不可能だ。しかもそれらが多数。正直言って、キリト達でも攻略は困難と見た。

「なるほどな。立地が悪すぎてあの値段か。なら納得だな。」

「これはちょっといくらなんでもモ、無理だナ。キー坊を呼んでも苦しいナ。」

「この周辺に、何かそれらしきクエストはあるか？情報があれば買うぞ。」

「うーん、ちょっと待ってくれヨ。……　あっタ。」
「内容は？」
『ロトの塩柱』ってクエストだナ。この神殿の最奥にある柱から女性を救出するクエスト。もっとも、周辺の邪神とボスが強すぎて誰も攻略で来てないみたいだナ。」
「そうか。よし、じゃああの物件を買おう。」
「正気カ!?こんなの家に入るだけで一苦労ダゾ？」
「安心しろ。買ったら攻略する。それまでは値下げ用に放置しておくさ。」
「やっぱり８００００は腹黒だナ。」
そういわれると少し傷つくものがあるのだが。
まあ、半分事実だから仕方ないと言えば仕方ないが。
「さて、帰るか。アルゴ？帰り道は…　っ!?」
「エッ？」
背後から狼型の邪神級モンスターが強襲をかけてきた。念入りに気配遮断はかけておいたはずなのだが、それ以上にあちらの敵感知能力が高かったのか!?
「ウウォルガアアアァァ!!」
とっさにアルゴを突き飛ばして噛みつきをよけるが、その直後に狼の尻尾から半透明な蛇のような触手がこちらに伸びてきた。

「チッ！セレビス！こっから最短で危険区域を抜け出すルートを割り出せ！」
「了解です！…　南に３００メートル、フィールドの切り替え地点があります。そこまでいけば追ってくることはないかと！」
「分かった。アルゴ、今のところに向かって走れ！お前なら何とか逃げ切れるはずだ！」
「俺っちはいいけど、８００００はどうするんダ!?」
「そんなの決まってるだろ。」
俺は両手に小刀を握って狼に突進する。そのまま空気の刃で蛇を切り捨てる。が、直後に再生を始めた。不死身かこいつ！
狼の名前を見ると『ｉｍｉｔａｔｅ　ｃｈｉｍｅｒａ　ｗｏｌｆ』…　直訳すると贋作のキメラの狼か？贋作となれば真作もいるのが常道だが…
「まずはこいつを仕留める。」
そのまま再び蛇の首を切り裂く。今度はそこに炎であぶる動作を加える。すると今度は再生をしなくなった。まあ、ありふれた手段ではあるが。日本じゃ神代から使われてきた戦法だし。
しかし、この狼は尻尾を封じられた程度で収まるような奴ではなかった。加速してこちらに噛みついてきた。

とっさに回避するも牙が腕を課する。するとそこから毒のバッドステータスを付けられる。確認に気を取られた隙にさらにもう一撃。今度は移動阻害のバッドステータスだった。お前は俺か。

どうにか回避しようにも先ほどの移動阻害が邪魔になる。幻影をつかって立て直そうとすれば一瞬で見破られる。

完全に相手のペースだった。

「クッソ。これ以上はじり貧。・・・　まあ、アルゴは逃がせたし、いいか。」

俺はあきらめ気味に肩の力を抜くと、そのまま狼に特攻をかけようと――

「待たせたナ、８００００！」

「アルゴ？なんで戻ってきて!?」

慌ててナイフを構えなおして足をえぐるように無理に態勢を変える。ぎりぎりでヒットし、狼は大きく距離を取る。これでひとまずは生き残った。

だが、逃げたはずのアルゴがなぜここに？

「このポーションを投げロ！あいつはそれが弱点ダ！」

「分かった！」

受け取ったポーションをそのまま狼に投げつける。先ほど足をやられたオオカミはもろにそれを被る。

すると、突然震え始めてみるみるサイズが縮んでいった。最初が巨大サイズだったのに対して今ではやや大きいが人ひとり乗せれるぐらいの大きさまでに縮んだ。ついでに邪神級から一般エネミーまでにランクが下がった。

これなら、行けるかもしれない。

「ゼアアッ!!!」

『ラピッド・バイト』からの『ミラージュ・ファング』。他にもソードスキルの連撃を叩き込んで何とか体力を1割まで減らした。

しかし、順調にいきすぎたせいか、油断していたのか、狼がアルゴの方へ突進するのを見逃してしまった。

「マズっ!アルゴ、避けろ!」

間に合わない、そう思いながら投げた『クイック・スロー』は狼の背中にあたって狼は地面に激突して動かなくなった。

慎重にとどめを刺そうと狼に近づくと、狼からクエスト発生マークが上った。

「‥‥アルゴ、これは、どういうことなんだ?」

「えッ!?あ、ああ、そうだナ。多分何かのイベントの一部だと思ウ。順当に考えて『ロトの塩柱』の一部だろうナ。」

アルゴは息を切らして顔が赤くなっている。ＡＬＯでも息が上がると顔が赤くなる

のか。初めて知った。
「えっと、狼を調べればいいのか？なんかまだ攻撃しそうだけど。」
俺は恐る恐る狼をつついてみると、ピクリと動きこちらを向いた。
短刀を構えて俺は威嚇すると、腹を俺に向けて仰向けになった。これってもしかして…
「降参の、ポーズ？」

それからしばらくすると、狼を仲間にするかという問いが現れたのでＹＥＳを選択すると、狼の名前の設定欄が現れた。
変更は不可とのことなのでしばらく悩んだ末に『ウォセ』にした。アイヌ語のウォセ・カムイからとった。意味は吠える神と言ったところ。
「フーン。慣れれば意外とかわいいもんだな、コイツ。」
「……」
「アルゴは触らないのか？」
「えっ!?いや、俺っちは犬が苦手だカラ…」
「狼だから犬とは親戚だけど違うから大丈夫だろ。」
「うう…　わかったヨ。す、少しだけだゾ？アト…」

「あと、なんだ？」

「…　８００００が、ちゃんと隣にいるなラ、イイ。」

ものすごく小声で服の裾をつまみながら言われると破壊力が抜群。こうかは　ばつぐんだ！

「お、おう…。　いいぞ。」

それからしばらく、互いに無言でウォセの背中をなで続けていた。お互いに顔を赤くして、ウォセだけが暢気に伸びをしていた。少しだけ動物の鈍感さが羨ましかった。